
劣化薬による性転換

海龍会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

劣化薬による性転換

【Nコード】

N3240M

【作者名】

海龍会

【あらすじ】

とある博士が作ったある薬品。それは短時間だけの性転換薬だった。
それを飲んだ主人公に何も変化がなく、失敗品かと思われた。
だが…

始まり

目覚ましの時計が鳴り出した、僕は布団の中に潜り外気温から逃げた。鳴り続ける時計。…起きるか。

布団から出て、机の上にある時計を止める。

「午前六時十分、今日も何も無く始まる。…はあ。」

別に病んでいるわけではない、単に暇なのである。そう、僕は退屈しているのであるこの何も無い世界に。何も起きておらずに始まり何も起きずに終わるこの世界に。はあ、僕に神的な力があれば某力チューシャ娘より面白い世界にしてあげるのになあ。世界破滅しない程度に。もう一度言う、僕は普通、考え方が少しずれているだけである。ま、少し変わったおっさんのお陰で今のところは楽しいけどな。まあ、そんな事は如何でも言い。取り敢えず、朝食作ろう。

階段を下り一階にあるキッチンに向かう。今、僕は一人暮らし。家出したわけではなく単に父親が海外外出中、母親と妹はそれについていき、兄と姉はもう一人暮らし。ようは僕一人になる筈だったんだけど。まあ、アイツの事は後で紹介しても良いだろ。

「ん、取り敢えずこんな物だな。」

手抜きはしたくないので和食がウチの朝食だ。ご飯にお汁、夕食の残りの魚。

「ん、あの寝ぼすけ起こすの億劫だなあ。」

「誰が寝ぼすけなの？」

「おっ、おはよう。今日は早いですね。」

振り向くとそこには髪の毛ボサボサ、パジャマも型崩れしボタンが胸元まで開き、あの大きめの胸を見せ付けるあの子が居た。まあ、何時もの事だから僕も何も反応を示さないけど。

「そう？今日はやけに目覚ましが五月蠅く感じたから。」

やっぱ少し音量を上げというて良かったな。また、遅刻ギリギリに

為るまで寝られても困るからな。

「ん？何か知ってるの？^{るみ}琉巳。」

「ルミではないリュウミだ。そして、髪を梳かせ、服をちゃんとしろ、ボタンを留めろ。」

「はあい。分りましたあ、ルミイ。」

訂正する気無し。

「……プクウ。」

「かまって欲しいと思うのならさっさと着替えて来い。」

「ふぬう。」

少し唸り小走りで二階へと上がっていった。

ドアの閉まる音が聞こえ、朝食の盛り付けをしていると突然電話が鳴った。

「はい、今出るぞあ。」

受話器をとり耳につけた。

『よお、リュウ、面白いもん出来たから今すぐこおい。』

「ドクター、休日ならいけましたけど今日は学校ですよ。学校終わりじゃダメですか？」

『ん、薬の効果が可笑しくなるかもしれんしなあ。』

「まあ、変な薬作ったんですか？もう勘弁してくださいよ、変な化け物に襲われそうに為るのは。」

『大丈夫大丈夫、十万ほど上げるから実験台に為ってくれば……特典としてギャルゲーのソフト上げるからさあ。』

「ん、如何しようかなあ。」

死ぬ危険有、でもゲームは欲、でも死んだら出来ない。ん

『じゃあ、さあ、ワシの最高傑作スケスケカメラで撮った嬢ちゃんの写真もつけるからああ。』

「ルウミイ、なあに話してるのかなあ？」

『ん？何だ、嬢ちゃんもう起きてたのか…まだ就寝時間だと思って電話したのに。』

「おじ様あ、特典として何を上げるんですかあ？」

「よし、午後で良いぞお。」

「はい、分りましたあ。それと、最後のは欲しくありませんので。
(そんな物貰ってもモノホンいんだから意味無いし。つか、ばれたら殺されるし。)」

それだけ言い、僕は受話器を戻した。

「ねえ、何くれるって言ってたの？」

「ん？下らないもん。とりあえず、お前がそれ聞いたらすぐ殴りに行くような品物。」

それだけ言い、テーブルに座り朝食を取った。

「ねえ、何なのよ？」

「…前、お前を撮った写真をくれるだと。」

それだけ言い、食事を再開した。すると直ぐに頭頂部に激痛が走った。

「…あのさ、何処からともなく10tハンマー出すの止めようか？」

それだけ言い、食事を再開する。

「ハア、ハア、ハア、あれまだ残ってたの？」

「知らん、多分、お前が来たときに隠し撮りでもする気じゃないのか？僕は知らんけど。で、とりあえず、お前も食べ。あんまりゆくりしてると遅刻するぞお。」

「…ムウ、何で断ったの？」

「ん？見られたかったのか？」

またしても激痛が走る。たく、僕が石頭で助かったな、ヘタすりゃ刑務所行きだぞ。

「そ、そんなわけないでしょ！バツカア！！」

ああ、そうですか。多分後ろの方で物凄く赤くなってるんだろぅなあ。ま、それはそれで面白いけど。

後ろではまだ荒い息遣いが聞こえていたが少し落ち着いたのかテクテクと向かい合うように置かれた自分の椅子に向かい食べ始めた。

「よおっす！ご兩人、いつも変わらず仲良くご登校ですかい？」

「ん？まあな。」

そこに居たのは赤いショートヘアの我が友の武井氏である。

「なあリユウ、前から聞こうと思ってただけどさあ。何で、弥美やみってお前のうちに居るんだ？」

「詳しい事は知らん。何かお袋が家の手伝いようにって連れて来た子だしな。まあ、僕が全部やつちやつてるから単なる居候みたいな者だけどな。」

「ほう、でさあ、やつちやつたか？」

周りにいる登校中の生徒に聞こえないように小声でそう言った。

「死ぬ。」

「だらうな ナハハハ！」

安心したかのような笑いを上げる。何故、死ぬと言っただけで安堵するのかというと…この娘、男勝りなのである。喧嘩っ早いし負けず嫌いだし…百合だし…百合は関係ないか。まあ、それが世間体の弥美という人物である。とりあえず、アイツはヤンデレというものであると僕は思う。まあ、恥ずかしくなるといきなりぶっ叩いてくるし、羽交い絞めしてくるしな、まあ、とりあえず放っておくと何か泣きそうに為るという特性がある。それが可愛いと思うのは僕だけだろうか？…何か、とても長く話してしまった気がするなあ。

授業中

「フワアア。」

後ろの方から間抜けな欠伸が聞こえてくる。

「退屈う。」

無視しとこ。

「フワアア。」

またしても聞こえてくる間抜けな欠伸、さっきより大きな声で。

「五月蠅い。」

それだけ、最低限だけ体を捻らせそれだけ言い、授業に戻る。

「フヌウウ。」

不満そうな声が聞こえてくる、それと同時にクスクスと笑う声も聞こえてくる。
如何でも良いや、何時もの事だし。

服用

放課後

ウチの近くにある大きめの家に到着。

「ドオクター、来たぞお。」

それだけ言い扉を開け中に入った。

「お邪魔します。」

パシャッ

突如カメラのシャッター音が聞こえた、

「ヒヤウツ!？」

いたるところから鳴り響くシャッター音。

「ドクター、取り敢えず、死にたくなければ止めてください。」

僕がそう言つとシャッター音は止まった。それと同時に、白衣を着込んだ三十代半ばの男性がデジタルカメラを持ち現れた。

「ふむ、やはり高速連射機能の速度を上げなければいけないな。」

「取り敢えず、シャッター音の音量下げないといけないと思いますよ。」

「おおじいさまー!!!」

物凄い剣幕で弥美がドクターに向かっていく。

「いやいや、ほら見て、スケスケカメラチップは差し込んでないよ。」

「それでもいきなり撮りださないで下さい!!」

このドクター、弥美のおじさんなのだ。まあ、このように危ない物を作っているのだから弥美には怒られている事がしょっちゅうあるのだ。まあ、僕にとっては退屈な毎日の気晴らしにはなるが…たまに身の危険を感じる事がある。

「で、今回何作ったんですか？」

「んー、まあ、これだ。」

栄養ドリンクっぽい物が入ったビンを出した。ラベルには どの部分がくっ付いた感じのマークが張ってあった。

「何すかこれ？」

そのビンを取り、光に当てたりしてみた。

「ふふん、飲めば分るよ。」

「遠慮しておきます。」

そう言いビンを付き返す。

「まあ、そう言わずに。」

付き返したビンを武術みたいな感じで僕の腕を曲げ飲みました。

「お見事お。」

飲んだ瞬間吐き気を感じた。その数秒後、心臓に激痛が走り、それに伴い僕は呻き声を上げた。

「ちょ、大丈夫なの？」「ふむう、少し薬の効能が高すぎたか。」

等の言葉が聞こえてきたが反応示す余裕すらない、脈が大きく波打ち先程よりも数倍強い激痛が走り意識がシャットダウンした。

意識を戻し取り敢えず起きてみた。体の異常は何もない。

「ふむう、これは一体如何いう事なのだろう？」

「ドクター？一体僕に何を飲ましたんですか？」

「性転換薬、なんによ男女試作品一号。」

「なんちゅうもん飲ますんですか。」

「イヤでも、一時間で効果が切れるはずのものだからさ。」

「なあんだ、失敗品なんだあ、がっかり。」

「失敗品にも恐ろしさがあるんだぞおい。」

あの化け物の事を思い出してみろヘタすりゃ警察沙汰だったぞ。

「…確かにそうだね。」

「ん、何にも起きない事はない筈なんだが。」

「取り敢えず何か起きたら月五万下さい。」

「三万にしてくれないか？」

「それでも三万出すんだ。」

それぐらいの慰謝料は貰わんといけないだろ。

さてその後直ぐにドクター宅を出た。外に出ると初夏なのに冬並の寒さを感じた。

「……ま、気のせいだな。」

そう思いたい。これが何かの前兆とは考えたくない。
家に帰り夕食を作る事にした。

「……ん？」

洗面台で洗い物をしていると洗面器に移った自分の顔が何やら少女に見えた。目を擦りもう一度見ると元の顔であった。

今日は一段と疲れたしな。幻覚でも見たのかな？

そう自分を納得させ夕食を作り終えた。

「はああ。」

「？珍しいね、ルミが欠伸するなんて。」

「いや、何か、疲れてな。今日は早めに寝る事にするから洗い物頼む。」

「はあい。」

さて、その後直ぐに食べ終え風呂に入った。

「……ん？」

またしても水面に移る自分の顔が女性のようになった、落ちてきた水滴で水面が揺れ、元の僕の顔に戻った。

「やっぱり疲れてるんだな。さっさと寝る事にしよ。」

そう、思い風呂から上がりフラフラと自分の寝室戻った。

「うう、何か頭痛くなってきたあ。」

千鳥足でベッドまで歩いていき、躓く形でベッドに倒れこんだ。近くにおいてある電気のスイッチリモコンで電気を消し。眠りに付いた。

心臓が大きく脈打つ感覚がし、飛び起きた、部屋の中は暗く時計を

見るとまだ午前二時深夜。

起きる原因と為った心臓はまだ脈打つ事が分かるくらい大きく、息が荒く、顔は汗でびっしょりになりなどの渴きを感じた。

…水でも飲むか。

それだけ考えテツテと小走りで一階に向かった。

…何か服が重く感じるな。

等と考えつつ冷蔵庫内のミネラルウォーターを取り出しコップに開け飲んだ。

少し疑問に感じることもあり自分の手を見た。

…こんなに小さかったけな？それにスベスベだし。まあ、疲れのせいだろう。

そんな事を思い、ミネラルウォーターを戻し、洗面器の所に行き、コップを洗いついでに自分の顔も洗った。

「ふわあ、やつぱ、中途半端に寝るのは良くないなあ。…ん？」

自分の声がやけに高く聞こえるなあ、まあ、脳内変換が可笑しくなったんだなあ、明日の朝になっても戻らなかつたら三万だなあ。

等と呑気に考え自分の部屋に戻り残り四時間ほどの睡眠を楽しんだ。

ルミ

目覚ましが鳴った。昨日同様外気の寒さから逃れようとベッドに潜り込む。そして昨日同様に遅刻するのも嫌なので布団から這い出し、机の上に置いてある時計を止めに向かう。すると、普通に歩いているのに、何故か前に倒れそうな感覚に苛まれる。

「ん？風邪引いちゃったのかな？」

……？僕の声こんなに高かったけ？それに、何か口調が何か……まさかな。

そう思い、自分の後ろ頭に手を当てる。

……あれ？

何やら違和感を感じ髪の毛を少しとり、スウウッと滑らせる。その髪は滑らかに長く滑っていった。

「おいおい、冗談だよね？」

高い声を引つ提げ鏡のある浴室近くにある洗面所を目指す。

テッテッテ、ユサユサユサ、テッテッテ、ユサユサユサ

「……」

……何この走った後についてくる擬音は？

試しに跳ねてみた。

ピョオンピョオン、ユサツユサツ

……なんだろ？この途轍もなくOTZになりたくなるこの気分は……

鬱化しつつ到着う。

「……はあ」

鏡に映っているのは憂鬱な顔をした弥美以上と思える胸を持つ美少女がいた。

「今日、休もう。」

着替える気も起きなかったので取り敢えず弥美宛に置手紙を書き、ドクターの家に向かった。

ピンポン

「はあい、朝から誰ですかあ？」

寝癖だらけの髪のがらくたが現れた。

「……誰？」

「起きたらこうなりました。」

「ふむう、一応成功って事かな？まあ、色々確認したい事あるから入って。」

「はあい。」

首を傾げるがらくた。

「言葉については気にしないで下さい。」

さて、調査の名を借りた危ない行動をしようとするがらくたを締め、取り敢えず終了した。

「ふむ、脳波が微妙に違うな。」

「如何いう所がですか？」

「一つは口調、もう一つは行動、前に嬢ちゃんの脳波を取った記録に合わせると口調が99%と一致した。」

「行動は？」

「50%。」

「？」

「取り敢えず、似てる所は負けず嫌いだな。それと甘い物好き。これは最初からだけど。まあ、違ってる所は嬢ちゃんの反対って所だね。まあ、冷静沈着。」

それも元からだと思っぞあ。

「で、がらくた。」

「ん？なんだい？」

「何時戻るんですか？」

「見当も付かないね。私が午前中に来いと言った意味は薬の劣化による異常の危機を回避するためだったのだよ。しかし劣化が進んでしまったのを飲んだから、実験データとは違う結果に為ってしまっ

たようだな。」

「…その実験に使ったものは？」

「犬。」

「犬？どうせなら猿使いでしょうよ。」

「サルは高いしな。それに死んじゃった場合責任取るのめんどいし。」

「何も動物園から連れて来いとは言っていないせん。」

「…ツツコミが冷静だな。」

「それは元からです。とりあえずボクはいつでも冷静です。…何ででしょうね？何か驚く気力も起きないんですね。ボク的にはホント、早く戻りたい気分なんですけどね。まあこのままでも良いや的な気持ちじゃ混じってるんですねえ。」

「…ん、鬱になりやすいのかね？自製の籠が外れたみたい。」

さて、時計が十時を示す鐘を鳴らす音により、ボクは暗い思案から抜け出した。

「…あ。」

「どうかしたのかい？」

「…寝てる。アイツ。」

「？…成る程、通りで電話もノック音も聞こえないと思いましたよ。」

書置きの意味無いじゃないかこれじゃ。

「ん、取り敢えず戻ってみるか。」

「その格好でかい？徒歩で。」

…あ、そういえば寝巻きのままで来たんだった。ところで一つ疑問に思う事がある。

「良くある性転換漫画って男が女になると何か服がブカブカに為りますよね？」

「ふむ、多分、その書き換えは難しすぎるのではないかな？」

「身長より性転換の方が難しいと思うんだけど。」

さて、そのツツコミを普通にスルーされ、ドクター専用車に乗り込み家に向かった。

…ん、今更思うのだが、Aぐらいの方が適応出来るのになあ。そう考え腕を組むも、胸が邪魔で上手く組めない。…仕方ないので胸の下で組んだ。

…ふむ、こっちの方が普通に組めるな。…あれ？若しかして僕楽しんでる？……はあ。今日一日だけでありますように。

で、家到着う

ブ、ブ

ん？メールだ。

『よおつす 二人揃って学校遅刻って何してるのかなあ？取り敢えず、危ない噂立っちゃってるからメールしとくぜえ。具体的に言うところくらいまで言ったんじゃないかという事だ。』

「……」

『諸事情による無断欠席だ。そしてそれではないことを断言しておく。一つ言っておくとドクターの実験に付き合つての最悪な失敗によるものだ。取り敢えず、風邪だと伝えておいてくれ。何時治るか分らない風邪と。』

そしてメールを送信した。

「ん？誰からかい？」

「ダチ。どうやら弥美はまだ起きていないらしい。」

そして、ドアを開ける。

「しかし君の家は何時来ても豪華に見えるね。」

賞賛するような声で言うドクター！

それほどではないとは思うまあ、普通の家の三倍の大きさがあるとは思っけど。

「それは年に五回来るかどうかしかありませんね。」

「成る程な。…ところで、着替えるとしても元の服を着るのかい？」

「ええ、そうですけど。」

「んゝ、あ、僕の持つてるmフベラ！」

「（御庭番式小太刀二刀流奥義）回転剣舞、六連。手刀型。」

メイド服、そう言うつぽかったので、御庭番式小太刀二刀流奥義発動といった。

「腹減ったあ。」

朝食作っていなかったので一時間程時間使うしかないなあ。

「はあ、まあ良いか。これだと昼食なってしまうけど。」

早速作り始めるにもご飯を炊き直さないといけないし、お汁は作り直さなきゃいけないし（痛んで危ない感じの白い物が浮かんでいる）。魚はレンジで温め直せなければいけないし。はあ、昼食にしておかず少ないし。

少し溜息を付きせつせと昼食作りに勤しんだ。弥美の事を放つといったのは単に忘れていただけである、約一時間後。

「んゝ、ま、こんなもんだな。」

ヴゝ、ヴゝ

ん？またか。

『諸事情って何だ？ま、放課後お前のうち行くからよろしく。』

…そうかい。

『あつそ、来たければ来い。あと、何見ても変な気だけは起こすな。』

……』

…遊びで、十行ほど置いて。

『……byルミ』

こうかいて送信した。

「…書かない方が良かったかな？」

…てか、何でルミって書いたんだろボク。

案の定数十秒後に返信された。

『お前、どんな変な経験しているんだ？まあ、取り敢えず、何がどうなってるのかしらねえが、お前にそんな気はおこさねえ！！』

『…取り敢えず。ボクが飲んだビン見て想像しろ。』

昨日、何かの記念に為るかなと思って持ち帰ったビンを携帯で撮影し添付、送信。

「いただきまあす。」

一人は就寝、一人は気絶という状態の家の中で平然と食べている美少女とは、傍から見れば如何いう存在なんだろうか？

「自分で美少女って言っちゃったよ。」

一瞬にして気分を降下させたボクは三十分ほど掛けて食べた後、自分の服を着た。

「ん、前から思ってたんだがパンツに違和感を感じるのは何だろうか？」

後、胸がきつい。何だろ？例えるとすれば中学校とかにあるバスケットボールくらいの大きさのゴムボールを詰め込んだ感じだ。いや、これは言いすぎだった、けどそんな感じた。

「むう、取り敢えず寝てよ。」

そう思い一階の洋室においてあるソファーに寝転がり寝る事にした。

何時間経ったんであろう？誰かの視線を感じ目を開けるも誰もいない。

「……ふわああ。」

欠伸と伸びをし、時計を見る。

「午後四時三十分。下校時間、か。」

ポケエツとした頭でそんな事考えていると上の方が騒がしくなった。

「弥美が暴れてるのかなあ？」

直ぐに男の怒鳴り声が聞こえてきた。

「……？」

取り敢えず、二階の方に向かってみる事にした。

「だあかああ、これは研究であってだねえ！」

「手前、単なるエロ人かと思ったら誰でもありか！？」

「誰が好きでカメラセットするんだ！？さっきからいつてるように研究だと言ってるだろうが！」

「博士さん、貴女がそんな人物だったんですね。」

「その美人さん！勘違いしないでね！私は冷静で自然なエロです！！」

「単なるエロが男の部屋に隠しカメラセットするか！？」

隠し、カメラ？よし。

ボクは近くの壁を叩く、壁に筋が入り、二本の小太刀状の木刀が出てきた。

「ドオクター？まさかとは思うけど成功してもそんな事するつもりではなかったでしょうねえ？」

「あの、えつと…」

言いよんだ。よし、確定。

「（御庭番式小太刀二刀流奥義）回転剣舞、六連。」

手刀であつたため先ほどは威力が激減していたが木刀では、如何かな？

「ザンバトーウ！！」

変な悲鳴をあげ吹き飛ぶドクターの服から…スケスケカメラで取つたであろうボクの写真がふわぁつとでてきた。

「いっぺん死んでみる？」

足で床を叩くと太刀状の木刀が一本出てきた。

あまかけりゅうのひびめき

「天翔龍閃。」

超神速の抜刀術で地面に落下しかけていたドクターをもう一度先ほどの二倍浮き上がらせた。

「瞬動。」

舞散り始めている写真を全て一瞬にし回収した。

「…うわぁ、ドクター、何もここまでしますか。（未婚の四十前の男、おそろしや。）」

合計三十枚の写真をポケットに入れる。

「あのう。」

「ん？…あれ？いたんだ。いらつしゃあい。」

少し間延びした声でお出迎え。

「む？まさか、キイイイ！！何で弥美よりも大きいのよあ！！」
「フヒヤ！？」

「あのう、ユミさあん、リュウ君が色々と危なくなってるからそのくらいにしてくれ。」

「…フレイがそういうんだったら止めるけど。」
「……うう。」

何だろ？目の前がぼやけてきたなあ。

「あれ？若しかして…リュウ君が泣いてる！？」

「フエ？泣いていませんよ？アハハハハ。」

「ふむう、女性為ったため涙腺が緩くなっているんだなあ。」

「…何時からそこにいるんですか？そしてそのカメラは何ですか？」

「ん？観賞用のカメラだよ。」

「お庭番式小太刀二刀流奥義。」

「回転剣舞、六連。」

右から攻撃を加えデジカメを破壊した。

「ああ！」

「ドクター、もう一度その様な物でボクを撮影しようとしたら…命の保障は出来ませんよ。」

「はい。」

「ところでさ。弥美は如何したんだ？」

「寝てるよ。」

「この時間まで？」

「起こさないでいると一日中寝ている時もある。」

「なるう、つまりヤミちゃんはリュウ君の惨状を知らないわけね。」

「そういう事。」

「フワア…アアアアアア！！！！」

「あれ？起きたみたいだな。」

その後すぐに階段を下りてくる音が聞こえた。

「ルミイは居るの！！！！？」

取り敢えずどんな反応を示すか静かにしておこう。

「あれ？三人ともなんで来てるの？」

「ん？二人して休みだったから何してるのかなあと。」

「二人して？じゃ、ルミも休んでるんだ。…何処に居るの？」

「……」

「あれ？その子、誰？」

「そこに立っている人物から連想してください。」

「あれ？おじ様？…へ？まさか。」

「そのまさかだと思うよ。流巳君だよ。」

「…ええええええ！？」

成る程、予想出来ていたので驚きの声は低めか。

「…でも可愛い。」

うん、それは分ってる分ってるから言わないで欲しい。

「苛めなくなるくらい。」

…ん？今、また身の危険を感じる言葉を。

そう考えていると弥美が近付いてきて、後ろから抱き付いてきた。

また胸なのかと考えていると耳に違和感を感じた。

「…フエ？」

違和感が消える、が直ぐにまた違和感そう何か湿っていて生暖かいものの中に入れられた感じだ。つまり、某神娘が巨乳娘にやっている耳カプと言うものである。

その後ご想像にお任せするが、前と同じ様に最後にはボクの目の前はぼやけていた。

そしてこの奇妙な一日の続きはその二日後にも起きる事はその時のボクはまだ知る由もなかった。

ルミ（後書き）

はい、海龍会です。

ルミちゃん（流巳）の言つてた技は某流浪人漫画に出てきます。

ついでに言いますと武井君は之より先はサブキャラ化していきます。

普通の日常のはずだった…（前書き）

龍炎流巳のちょっとしたプロフィール

龍炎流巳

年齢 16

生年月日 2月14日

高校 一年

家族構成

父親はどっかの孤島で何か作業中（法律に触れている何か）

母親は父親を追っかけて家にはいません。幼稚園くらいの妹を引き連れて。

三個上の兄は家を出て仕事中（ブラコンの為流巳には毛嫌いされている。）

五個上の姉も兄と同じ（女王様的な感じ、流巳を扱き使ってる。しかしそれなりに慕っている。）

住宅街にある屋敷に居候の弥美と二人暮らし中。

以上

普通の日常のはずだった…

ルミ（女性的な名前なので）化した次の日、元の流巳、つまり男の僕に戻っていた。一応ドクターに戻ったと連絡し、僕は日課の朝食と弁当作りに専念した。料理をし終え、弥美を起こしに行く。

コンコン

「グスウクスウ。」

よし、寝てる事確認。

ドアを開け、布団に包まってる弥美の所までゆする。

「弥美い、起きろお。」

「フミュウ、ん？あ、おはよう。」

「おはよう。朝食出来たから早く来い。」

「はあい。…！？も、戻ってる？！」

「そうだが、何か不満でもあるか？」

「もう少し遊びたかったのに。」

「僕的には二度と遊ばれたくない。」

女の子はあそこまで恐怖に関して敏感だとは知らなかったあ。そして断言しておこう、僕はルミ化すると涙腺が開きやすい事を。

「プクウ。」

「不満を持つな。そして服をきちんとしろ寝癖を直せ。」

「分ったから出て行つてよ。」

「はいはい。」

そう返答し部屋を出た。

さて、その後も何一つ可笑しな感覚もなく学校に到着。なにやら視線を感じたが…

「よおつす。……ん？何だその「えええ。」的な表情は？しかもクラス全員で。」

その問いに対して全員して武井を見た

「いや、あれだ。そのう、なんだ？」

言い淀みながら携帯をコソコソと操作し始めた。

「…武井。まさかお前…」

「いやあ、あれだ。お前で無いとすれば良いもn…」

ポケット内の鉛筆一本を取り出し…

「牙突零式。」

武井の取り出している携帯に鉛筆を突き刺した。

「……」

突き刺した携帯には何時取ったのだろうか大量の僕の写真が表示されていた。

「よし、他にそのデータを持つてる奴は今すぐこの場で消せ。出なければ無条件で男子から壊していく。」

言葉が終わる前から大量の生徒がデータを消しに取り掛かった。女子も含めて。

「少し待て。」

携帯を弄ってる全員の動きが止まった。息ピッタシだな。

「まあ、取り敢えず男子は分る。何故女子まで弄ってるんだ？」

僕の問いに近くにいた女子が答える。

「だって武井、全員にそのデータ送ってるんだから。」

…ん？今凄い情報が耳に入ったんだが。

「昨日の六時位かな？こういうメールと一緒に届いたよ。」

その女子がそのメールを見せてくれた。

『件名：大スクープ

文章：この写真の人物誰だと思うか？…』

間に僕の写真が添付され…

『…何とあのリユウだぞ。変な薬飲んでこんなになってるんだぜ。凄いよな？！苛めたいよな？ヤツてみ』

取り敢えずそこまで読んで携帯をその女子に返し。

「武井。」

僕がそのメールを読んでいる間に教室から出て行くこうとしている武

井を呼び止める。

「いつぺん、死んでみる？」

フリーダム君のがやっている普通男子生徒のMK5的な表情を見せ首を傾げる。

「え、遠慮します、サー。」

「じゃあ、地獄見てみよっか？」

武井の近くによって行き、胸倉をつかむ。

「お、お許し下さい！！！」

「ん、じゃあさ、このクラス以外に誰に送ったか言ってみてくれるか？」

「……ぜ、ぜんこうフゴフツ！？」

右足で武井を蹴り飛ばす。そして僕は直ぐに放送室に向かった。

『おはようございます生徒諸君。一年四組武井良助君より発進されたメールについていた写真を今すぐに消してください。消さなければ今放送中の男子生徒が修羅化して壊しに行きますのでご注意ください。もし、学校外の人に送っていた場合は無条件でグラウンドに頭だけ出して生き埋めにしますのでご注意ください。以上、絶対零度の笑みを見せている流已でした。』

さて、取り敢えず僕が見つけた限りでは生き埋め君は五十人を越えました。まあ、女子生徒は見逃しておきました。警察沙汰にされても困るので。女子生徒の場合は十人くらいでした。

「な、なあ？リユウ？タケは良いとして何故に俺まで？」

武井よりはあまり親しくないが友達の芳賀がそう尋ねてきた。

「まあ、あれだ。連帯責任で所だな。」

武井が何故全校生徒に送る事が出来たのか疑問に思い、尋ねた所、芳賀を含む一二三年生五名が一致団結していたらしいのです。

「それよりお前はまだ良い方だろ？武井を見てみる。」

とりあえず近くの用水路で捕まえてきた蛭にエ口野郎をご提供した

相当腹が減っていたようで顔中にくっ付いていた。

「いやあ、まあ、そうなんだがな……あれだよ。もしもの事だけどさ次の日起きたらまた女の子に為るじゃないかって話だよ。」

「んー、まあ、その時はまた休めば良い話でそれが続くようだったら何か説明すりや良いだけの話。とりあえず、一日だけの事なのに全校生徒にその写真を送信するあの精神が気に喰わねえんだよ。」そしてその写真は涙腺が開いていて瞳が潤んでいた自分で見ていても可愛いと思える写真であった。

「……んまあ、そこまで考えていたのか。取り敢えず、すまない。そしてご愁傷様。」

「ああ、本当。継続的でないことを祈るよ。」

夕暮れに染まるこの世は僕の普通的な人生の終わりを告げるようにも僕は感じ取れた。

普通の日常のはずだった…（後書き）

フリーダム君がやっている普通男子生徒のMK5とは…
知りたくば神娘ちゃんの憂鬱の漫画を見てください。

繰り返す悪夢（前書き）

この作品は一日性転換する流巳の生活を着々と書いていく物語です。過度な期待はご遠慮願います。

また、物語序盤で色々な事が起こりネタ切れを起こす可能性があります。ますのでご注意願います。

ちなみに、この小説を載せるにあたり妹の存在をすっかり忘れていた為出てくることは今の所皆無です。

繰り返す悪夢

目覚ましが鳴る、そして起きる、ベッドから降り目覚ましを止めに前に倒れそうになりながら歩み始める。

……ん？

胸の所を触ってみると軟らかい弾力発見。無駄に…

「…悪夢再びなのね。」

高い声でそう呟き時計を止め、一階に下り、博士に電話。

『多分、劣化した薬を飲んだから一日起きに細胞以上による性転換が起きるんじゃないかな？』

「解毒薬を作ってください。」

『ふむう、まあ、一応君が飲んだ薬ぐらい劣化させたのを作って試してみるよ。でもあんまり期待しないでくれよ。』

「よろしくお願いします。」

それだけ言い、受話器を下ろす。すると直ぐに電話が鳴り出した。

「…ふむう、誰からの電話だろう？」

一応受話器を取った。

「はい、もしもし。」

『…あれ？番号打ち間違えたかな？あ、あのそちらは龍炎さんのうちでしょうか？』

…芳賀か。

「ええ、そうですけど。何の用だ芳賀？」

『……え？』

「此方は龍炎流已ですけど。何の用だ？」

『うわあ、悪い予感当たっちゃったみたいだな。』

「ああ、一番最悪な将来を送りそうになりそうだよ。」

『…ご愁傷さま。』

「取り敢えず何の用だ？」

『いやあ、ちよっとタケがヤバイ事しかした。』

タケとは言わずとも武井の事だ。

「ん？」

『そのう、お前の写真集っぽいものを。いやっ！俺は関係してないぞ。タケにそれ作るの手伝えって言われたが。』

「よし、その情報提供感謝する。あと、今日休むからそう言っていて。」

『ん？そんなの弥美に頼めば良いじゃないか？』

「ボクの危ない予感が当たると思うから。」

『おお、そういう事か。よし、俺から一言言っておく。』

「何だ？」

『気をしっかり持て、でなければお前その場で気絶する。由美に付き合っで行った時に鼻から赤い物が出かけた。』

「芳賀、お前付き合っていたんだ。」

知らなかった。

『まあ、そういう事になるがそれっきりそんな場所には行かないようにしてる。』

「実体験による情報ありがとう。」

『頑張れ。流石。ルミで良いか。』

「まあ、それで良い。そっちの方が自分を見失わないで済みそう。」

『……ああ、女の方はルミだって事か。まあ、頑張れ。』

「ああ、頑張るよ。」

芳賀との電話をやめ、料理を作ろうと振り向くと目の前にドオンと弥美の顔面があった。

「……な、何している？」

「……と電話中に耳カプしようかになって。」

「頼む、そんなボクの心が壊れそうなイタズラ止めて。」

「ふむう、ズルいい。」

「何が？」

「その顔お！可愛い！」

「だから、可愛い言うの止めてって言ってるのに。」

「やっぱり口調変わるんだね。」

「まあねえ。」

「ねえねえ、さっきの話だと一日毎に変わるの?」

「予想だけどねえ。」

「じゃあさあ、服買いに行かない?主に下着類。」

「やっぱりなあ。そう来ると思ったよ。」

「へいへい。取り敢えず、あれだ危ない物を選ぶな。武井が犯罪を犯さなそうなのにしろ。」

「ぶ〜。」

「…お前、またボクを泣かせたいの?」

「……うん」

「コイツをSにするボクって何だろ?」

「…取り敢えず今すぐ荷物纏めてこの家から出て行くか今の条件を呑むか選べ。」

「ん〜…住む家なくすのはヤダ。」

「ある意味捨て子みたいなものだしな。」

「だったら条件を呑め。」

「…はあい。」

「渋々了承する弥美の表情を眺め少し笑う。」

「じゃあ、料理するから待ってる。」

「はい。」

コンコン

「ん?誰だろ。弥美ちよつと出てくれ。」

「え〜?」

「ボクが出たら何かと面倒だろ?」

「なるう。」

コンコン

「はあい」

何故か楽しそうにドアを開けに行く弥美。ボクはそれに構わずキツチンに向かった。

「ルミイ。」

「ん？如何した？」

呼ぶ声がしたのでガスを止め玄関に向かった。

「何か人来たあ。」

そこにいたのは昨日生き埋めにした人々だった。

「何か用ですか？」

不機嫌そうな口調で言うと。

「い、いや、こっちこそ何かすまなかった。それとそれのお詫びついでにこれ持ってきた。」

男子生徒に手にはSDカードが握られていた。

「これは？」

「武井の隠し撮り写真のメモリーだ。これでチャラという事に。」

「ん？ボク的には昨日ので許した…まさか…」

「芳賀君からの電話でその試作品燃やしたしそれとこれがそれのお詫び的なもの。」

「…まあ、良いですけど。とりあえず。一つだけ約束してください。」

「

「何かな？」

「武井の碌でもない商売にもう二度と加担しない事特にボクに關係する物に。」

「あ、ああ。理解したよ。」

「ではよろしくお願いします。」

生き埋め君達はそそくさと帰っていった。

「良いの？何も言わなくて。」

「だってさ、もう手遅れ的な感じだし。」

それだけ言い朝食作りに戻った。

「ねえ、髪邪魔じゃない？」

「ん？確かにそうだな。」

「じゃ、纏めれば良いじゃん。」

「…なるほど。じゃあ、ヘアゴム一つ貸して。纏めるから。」

「はい。」

間延びした返事をしとテテと階段を上っていった。

「……、今の自分を楽しいと思えるのは何でだろう？」

そんな呟きを暇つぶしの道具にし料理を作る。

料理が終了するのと同時に階段を下りてくる音が聞こえてくる。

「やけに遅かったな。……なんだその手に持っている白いものは？」

「ん？パンツ。だって男物だと違和感あるんじゃない？」

細いなあ色々と。まあ、そんな事は如何でも良いんだが。

「……まあな。」

「じゃあ、これ穿いといて。それとはい、ヘアゴム。」

取り敢えず最初にヘアゴムを受け取り、髪を一房に纏めた。

「……上手いね。誰かから教えてもらったの？」

「ん？姉貴。毎回毎回やってくれ言うからやってた。」

「……ただだけお嬢様ぶってるの？」

「単に自分がやると失敗するからボクにやらせてただけ。」

「それだけ上手いの？」

「この通り。」

そう言いくりと回った。

「ん、何か一つ一つの動作が可愛いんだけど。」

訂正するのも嫌になつてきたので溜息を付いた。

「まあ、朝食出来たから食べるぞ。」

「はい。」

「……そういうば、お姉さんの事で思い出したんだけど。お母さんは会った事あるけど他の家族如何してるの？」

「親父は海外に長期的出張、母さんはそれを追って。姉貴はどっかの会社の秘書。兄貴は科学的な会社の副社長。妹は母さんと一緒。」

「それって何時から？」

「親父は弥美が来る三年ほど前から、姉貴は一年前、兄貴は二年と半年前。」

「……つまり、小学生ぐらいから一年ずつぐらいで一人ずつ出て行っ

「たんだ。」

「まあ、そんな感じだな。」

「……寂しくなかったの？」

「んまあ、寂しくないといえは嘘になるけど。近くに一人はいたからそれほど寂しいとは思わなかったなあ。」

なあんとなく弥美を見ながら話す。

「ふうん。そうなんだあ。」

ヴウ、ヴウ、ヴウ

「ん？電話だ。」

「はい、もしもし。」

『……』

「ん？もしもあし。」

『リユウか？』

武井か。

「何か用か？そして殺す。」

眉を吊り上げながらそう言うておく。

『そ、そう言うなよ。な？』

「なあ、SDカード如何した？」

『な、何でそれを？！あ！おま！？』

「お詫びだって言っけてきてくれた。」

『な、なあ、五万やるから……』

「四千五百万。」

『な、何て中途半端な金要求するんだ？！』

「四千六百八十九万。」

『微妙に上がってるしよ！』

「嫌なら壊す。」

『ぐう、わ、分った。』

「了承してもやる気はねえけどなあ。もう、ゴミ捨て場に捨てたし。」

『なっ？！』

「じゃあなあ。」

それだけ言い電話を切る。

「誰から？」

「武井から。これ返せだ。」

そう言いさつき武井の元お友達から貰ったSDカードを見せた。

「返せば良いじゃん。」

「ボクの人生が今以上に可笑しくなる。」

「なるう。」

そんな会話をし朝食は終了した。

洗い物をさつさと終わらし、弥美の持ってきた細い白い物を持ち自分の部屋に入った。

少し悩み穿いてみるとあまり違和感を感じなかった。

「……なんだろう、この自分への絶望感は？」

取り敢えず服を着て一階へと降りた。

「むう、やはりシャツでは何か危ないね。」

なんと言うか……うん、無駄に動く。

「……だったら貸してくれ。」

「サイズが違うしね。私の視点的に言えばDだね。私はC。」

……姉貴、弟は貴女より大きいそうですよ。……何か殺気を感じた。

「じゃあ、行こう。」

「へいへい。」

生返事で弥美の後を付いていく事にした。

さて、十数分後、ボクは彼女も居ないのに来て良いのかと思う場所の目の前にいる。

「……なあ、取り敢えずこんな場所じゃなくても良くないか？」

「えゝ。でも、ルミちゃん可愛いしい。」

コイツ、何時からボクの事をちゃん付けする気になったんだ？まあ、その方が区別しやすいからいいけど。

「じゃあ、イコイコ。」

コイツ、真面目にボクが男である事忘れてないか？

数時間、いや、数十分ほど出来事であったのだろうが、外見的には女の子のボクは多少気まずく弥美の近くで縮こまっていた。いや、逆にそれが興味を引いたのだろう、数メートル近くに來た客一人一人がこちら側を見ていた。

まあ、そんな目に遭いながらも弥美のそばを離れる気は起きなかった。何故かって？そりゃ、あれだ。自分のために買いに来てくれた人を放っていくほどボクは薄情者ではない。

とりあえず、弥美がどんどん入れる下着類には危険な下着があったのでそれをさつともとの場所に戻していった。

会計はボクの帳簿を大きく狂わすほどの金額になっていた。まあ、今月の食費がつて所まではないので何も咎めずに買う事にした。レジに出した品を戻すのも気まずいしね。

さて、その後は普通に帰ってた筈なのに見覚えのある四人衆とばったり遭ってしまった。

「…学校は？」

「抜け出してきましたあ」

普礼。

「で、リュウ君の家に行っても鍵が掛かってるし芳賀君に聞いたら服系統見に行ったんじゃないかなって事聞いたの。」

由美。

「まあ、取り敢えず、色々と面倒なこと起きそうだったから俺も付いてきたわけだよ。」

芳賀。此処まではまだ良い。問題はその近くにいる高倍率カメラを持ったパパラッチっぽい奴の事だ。

「で、この阿呆は何故此処にいる？」

「知らない。どっかで聞いていたみたいで私達の後付いてきたみたい。」

いつの間にかパパラッチは僕の持っている服を物色し始めている。

「フムウ、高そうな物ばかりですなあ。」

…殺す。

気配と足音消し、エロパパラッチの後ろに回りこみ、首に腕を回し交差させ、一気に横に傾ける。

ゴキッ

そんな音と共に僕が手を離すとコテツと倒れた。

「カメラ、捨てるか。」

カメラを拾い近くにある川に投げ捨てた。

「いやあ、良いフォームだね。龍炎君、いや、龍炎さんかな？」

聞いた事のある高い声に少し驚きその声の方を見ると。

「ふむう、武井君の写真より実物の方が可愛いね。」

コバルトブルーの目の茶髪女性、我がクラス担任の冴島先生、その人がいた。

「あんまりそう言わないで欲しいんですけど。」

「アハハハ いやあ、三人がこそそと外出て行くの見たからつけてみたら。」

「つけていたんですか。ていうか先生授業は大丈夫なんですか？」

「授業？そんな物構わないよ、居なくなれば勝手に自習にしてくれるんだから。」

…この人本当に教師で良いのかな？某金髪関西弁教師ぐらい危ない立ち位置かと。

「それにもう正午だしね。」

ん？言われて確認携帯で。ああ、確かに。

「へえ？そうなの、私楽しくて時間分なかった。」

ボクはその隣で縮こまって確認している暇なかったしな。

「ん、あ。じゃあ、リュウ君の家行こう。」

「おお、それ良いなあ。それなら弁当代掛からなくて済むし。」

という事でボクの家決定…ご飯残ってるかな？

で、家に到着。

取り敢えず直ぐにご飯の確認、よし、大丈夫。味噌汁の方もOK
だな。あとはおかずかぁ。…まあ、冷蔵庫にある物を使えば良いか。
「ん？なんだ、龍炎君が作っているのか。」

「ええ、そうですけど。」

「私はてつきりヤアミンが作っていると思った。」

「昔からボクが作っていますよ。弥美が此処に来るのが決まったの
は本当突然でしたし、その前まで、母親に教え込まれてましたし。」

「そう答えながら冷蔵庫の中身を物色。ふむ、野菜炒めで良いか。野
菜は新鮮な方がおいしいし。…ところで

「先生、今、ヤアミンって言いましたか？」

「ん？そうだけど、私、ヤアミンとは友達みたいなものだし。小学
六年位かな？」

「へえ、そうなんですか。」

新たな事実発覚う。

「ところで、一日ずつそうなるのかな？」

「まあ、そうなるっぽいですね。」

「そう答え、野菜の下ごしらえを始める。」

「ん、とりあえず、ユー、セーラー服着ちゃう？」

「…はい？」

「だって、幾ら秀才の龍炎君でも一日おきに休んでちゃ、進級でき
ないよ。」

「学校にはあまり行きたくないんですね。あのパパラッチ君が居
ますし。」

「気を抜いたせいか、口調が女になった。」

「でもさあ、そうしないと私としてもね。クラス全員が進級が目標
なんだよね。だから、お願い。」

「………はあ、分りました。」

「着ますよ着れば良いんですね？」

「ありがとうね。」

感謝の言葉を述べ、先生は台所から出て行った。

「はああ。」

大きめの溜息を付き、調理に戻った。

数分後、野菜炒めの完成。

フライパンから大きめの皿に盛り付けテーブルの上に持っていった。

「へえ、上手だね。」

「そりゃあ、毎日作っているからね。」

さて、少し遅めの昼食を食べている時。

「なあ、弥美って料理できるんだろ？何でやらせないんだ？」

「だって私じゃこんな物出来ないし。それに、手伝おうと思っても手伝わしてくれないし。」

「へえ、何で？」

「料理はおいしいけど、台所が惨状に変わるから。まあ、漫画とかである下手つぴ娘が料理を作るときに起きる爆発が毎回起こるから、何時か台所が無残な姿になるかも知れんからボクがいつもやってるわけ。」

「へ、へえ。そうなんだ…ところで大丈夫？」

「台所が惨状…」くらいからずっとボクの頭を中華なべで殴り続けている弥美。

「取り敢えず慣れた。たまに度を越えたお仕置きが来るがこれくらいならまだましだ。とりあえず疲れてやめるまで待ってた方がその後が楽に扱えるし。まあ、兄貴に色々とされたから大抵の人間が嫌がるような事でも蚊に刺されたぐらいにしか思えなくなっただけだね。」

さて、ボクの過去話により一瞬にして無言になった食卓には一定のリズムで鳴らされる中華鍋の音が寂しく響き渡っていた。

さて、食事も終わり洗い物をしていると。

「ねえ、スリーサイズって分る？」

「？突然何を言い出すんですか？」

「いやあ、セーラー服作るにもサイズ分らないとね。」

「さあ？…あ。ドクターのところ行けばありますよ。」

「ドクター？」

「この薬を作った張本人です。」

そう言い、食器を洗い終わり、乾燥機の中に入れておいた。

「ふうん、そうなの。名前はなんなの？」

「…覚えてないです。取り敢えず博士ですから、ドクターって呼んでいますし。本名なんだったかな？」

「へえ。ね、その人の家に案内してくれる？」

「え？良いですけど。」

という事でやってきました。ドクター家。

「ドクター、居る？」

「ふわあ、はいはい、今行くよ。」

そう言い現れたのは寝癖だらけのドクター。

「ん？今回は何の用だい？薬はまだ完成してないよ。」

「まあ、取り敢えず、ボクの資料貸して頂けませんか？」

「？…ああ、そういう事か。少し待て。」

それだけ言い中に入っていた。

数分後ドクターが一枚の紙だけ持ってきた。

「はい、ルミのデータ。」

ドクターから先生がその紙を受けとった。

「うわあ、データで見てもスタイル抜群って分るね。」

「ん？そちらの女性は？」

「ボクの担任。」

「ほう。綺麗な方ですね。」

「間違ってもあれで撮ろうとは思わないでくださいね。」

「アハハハハ。幾ら私でも本当に危ない人は撮らないよ。」

「…危ないとは私の事かな？秀一君。」

「アハハハハ…」

「あれ？知り合いですか？」

「学生時代の友人。この科学者さん、自分の欲求に忠実に動くからいつも手を妬いていたの。」

「初代パラッチ君なんだ。ドクターって、まあそんな感じしてたけど。」

「ま、これなら一応注文できるね。」

それだけ言い先生は紙を返す。

その後、直ぐに先生と別れ一人自宅へと向かった。

我が姉、登場（前書き）

この話は龍炎流巳が性転換するようになって数週間後の話です。

我が姉、登場

「はぁあ。」

「ルミイ、如何したの？」

「いや、昨日のあれの疲れが抜けないから。」

昨日の夜、ドクターの失敗作の化け物に夜中追い掛け回されていた。

「あれは最悪だったよね。」

「…弥美は僕を囷にしてぐっすり寝てたけどな。」

「アハハハハ」

言い返せないので笑う弥美。

「でも、何で逃げ切れたの？あれって一度目を付けられたら一生追いか掛け回されるんじゃないの。」

「ん？取り敢えず隠れてたら、発作起きて気がついたら戻っててさ、まあ、見つかったには見つかったけど見た目違うから違うところ探しに行こうとしたあいつらを後ろからボコして捕まえた。」

発作というのは性転換時に感じる、大きな鼓動音とそれによる気絶である

「うわぁ、凄いな。」

「あれ、感触が気持ち悪いから二度と触りたくないな。」

感覚的に言えばスライムぐらいの硬さの形のあるアメーバである。

「よぉ、リュウ、昨日は大変だったな。いや、今日でもあるか。」

寝不足であろう芳賀の目の下にはクマがあった。

「ああ、まあ、何とか捕獲には成功したけどな。」

「後で何かおごってやるよ。」

「ああ、じゃあ、コーヒー、一本頼む。」

それだけ頼み、机に突っ伏した。

その後、四時限の終わりまで何も心配なく穏やかに過ごしていく僕…その穏やかさは通話一回で崩れ去ってしまうとも知れずに。

「ヴー、ヴー、ヴー」

昼休み時、携帯が鳴り出した。

「……はあい。もしもおし。」

「……」

「？もしもおし、誰ですか？」

「リュウ？今すぐ帰って、玄関の扉を開けなさい。さもなくば、貴方の指が変な方向に曲がっちゃうわよ。」

「……」

僕の目の前は一瞬で白くなった。

「あれ？ルミイ如何したの？」

「リュウ 早く帰ってきなさい」

「……」

「ヘタレリュウ……！さつさと家に帰ってきなさい……！！」
クラス中に響くようなあの悪魔のような声が携帯から響いた。

「はいいい……！！」

その後の行動は覚えていない、気がつくと家の近くに居り、玄関の前にはご立腹の茶髪女性が居た。

「姉様、あねさま只今来ました。」

「遅い……！電話してから三十分も経ってるじゃない……！」

「すいません。ところで、姉様、一体何故いきなり帰ってこられたのですか？」

「ん？単なる暇つぶしよ。仕事も区切りついたし二日間お休み貰ったから暇つぶしついでに。我が弟の姿でも見ようかなと。」

「……え？二日間？！その、えっと、ここに？」

「そくに決まってるじゃない。我が家なんだし。」

「二日間、地獄と化すか、不幸の少年と化すか……」

「取り敢えず早くあけてくれないかな？」

「はい、畏まりました。」

鍵を開け、家の中に入れる。

「へえ、案外綺麗じゃない。」

姉様と違うんですよ。姉様と。

「何か言った？」

「いえ、何も言っておりませんよ。」

「そう？取り敢えず、昼食作って。どうせなら中華で。」

「じゃあ、ラーメンで良いですか？」

「チャーシュー多めでね。即席は無しだよ。」

「分ってます。」

そう言い、昨日の残りの麺を取り出す。

「あれ？昨日何か祝日だったけ？」

「単にパーティみたいなのですよ。」

そう良い、冷蔵庫からチャーシューを取り出す。

鍋に、鶏がらと色々と投入しスープを作る。

「ん？ねえ、何で、椅子のクッション二つも出てるの？」

「あれ？母さんから何も聞いてないんですか？」

「だって、家出てから話した事無いし。」

「一年に一回くらいは電話してくださいよ。たまに電話すると姉様から電話が無くて寂しいよとか言っていましたよ。」

「そうなの？ところで、話戻すけど何でクッション二つ出てるの？」

「同学年の居候が一緒に住んでるんです。」

「へえ。え？やっちゃったの？」

「何で、誰もがそんな事聞くんですか？してませんよ。」

「もう、ヘタレなんだから。」

関係ないでしょ。

ダシをとり終え、麺を湯切りし盛り付けダシをかけ、チャーシュー

その他の具も載せた。

「姉様、出来ましたよ。」

そう言い、姉様の前に料理を出す。

「ふむ、いただきまあす。」

先ず先にスープを飲み次に麺を食べた。

「ふむ、リユウ。」

「はい、何でしょうか？」

「腕上げたね！合格。」

「ありがとうございます。では、僕はこれで。」

「ん？何処に行くの？」

「学校に戻るに決まってるじゃないですか。いきなり呼び出されたんで荷物そのまま置いてきてしまいましたし。」

それだけ言い、ダシを他の容器に移し、他のダシ取りに使った物は使えそうな物のみ冷凍庫で凍らす事にした。

使った道具などを洗い学校に戻る事にした。

「姉様、食べ終わったら台所の方に出しておいてください。それと、姉様の部屋はその居候の人が使っていますので仕方ないので兄貴の部屋か、母さんの部屋を使ってください、姉様の部屋の道具の大半は物置の前の方にありますので分ると思います。」

「はあい、畏まりました。」

「あ、あと、勝手に部屋の中に入らないで下さい。色々と仕掛けてありますので。」

「ん？何でまた。」

「諸事情です。」

それだけ言い学校に戻った。

「はああ、地獄だあ。」

戻ってきて直ぐに机に突っ伏す僕。

「ルミイ、誰からの電話だったの。」

「姉様。」

「姉様？」

「…姉貴。」

「ああ、お姉さんね。でもなんで地獄なの？」

「後々分るよ。」

「…でさ、足大丈夫？」

「…足？」

「何の事だ？」

「いや、だって電話切るなり窓から飛び降りたから。」

「…覚えてない。何も考えずに走ったから。」

「な、何も考えずに。」

「何か考えて走れば…命の危険になるかもしれないから。」

放課後

真つ直ぐに家に帰った。

「姉様、只今帰りましたよ。」

「ん、おかえりい。」

その声と共にキセルを咥える姉様が顔を出した。

「…ルミちゃんにそっくり。」

「ん？そっちの女の子誰？」

「さつき言いました、居候です。」

「ふゝん、案外可愛いじゃない。」

骨董品でも見定めるかのように弥美を嘗め回す姉。

「こんにちわ。えっと…」

「四義しぎだよ。」

「四義さんですか。えっと、家を貸してもらってありがとうございます。」

「良いの良いの気にしないで。母さんの決めた事なら逆らわないしね。ところで、リュウお腹空いたあ。バウムクーヘン作って。」

「幾ら僕でもそれは作れませんよ。カステラで良いですか？」

「じゃあ、それで手作りね。」

「はい、畏まりました。」

「ルミが料理得意な理由やっと分った。」

数時間後

「出来ましたよ。」

「うん、これこれ。どれどれ…」

そう言い、一口食べる。

「ん、ちよつと甘すぎるかな？」

「そうですか？ 姉様甘い物好きだった筈なので砂糖ではなく蜂蜜を使用したんですけど。」

「……まあ、これはこれで美味しいわ。」

「で、姉様、夕食の方は如何しますか？」

「ん、甘い物食べた後だから辛い物が良いなあ。少し辛めのカレーをヨロシク。」

「はい、畏まりました。あ、それと何時もの事ですけど朝食のほうは此方で決めさせていただきますから。」

「分ってるよ。」

さて、今日は何事も無く過ぎていった。

目覚ましが鳴り、布団から出る。

ピヨオン、ピヨオン、ユサッ、ユサッ

確認終了。ルミ化を確認。

いつも通り下着を交換し、不快感解消。ヘアゴムを使いポニテにする。

いつも通り、下に降り、料理を作る。

ペタ、ペタ

「ふわぁ、おはよう。」

「おはようございます。」

姉様はそのままソファに腰を下ろしテレビを見始める。

「……ん？」

姉様の何やら疑問の声が聞こえるも、その後の言葉聞こえなかったので何も反応せずに料理を続けた。

トテトテ

「ふわぁ、おはよう。」

欠伸をしながら降りてくる弥美。

「おはよう。」

「おはようございます。」

「ああ、おはよう。」

「ちよつどよく朝食できたから食べるよ。」

「……ん？……ねえ、アンタ誰？」

「反応、遅いですね。姉様。」

内面で苦笑しながら言う。

「あ、姉様、ってまさか。…リュウ？」

「諸事情でこうなっちゃいました。」

そう説明するも驚きの表情を隠せない姉様。

「
…
か
」

「か？」

首をかしげると、姉様の姿が消え、後ろから抱きつかれた。

「可愛い」

え？ ええええええええええ！！！！！！！！！！

「リュウ、何でこんなに可愛くなっちゃってるの?! ムツ、私より胸大きいなんて、もう苛めてやるう!!」

そう言うつと、姉様は、ボクの胸を弄くり出した。

「フワァッ。」

姉様の腕を払おうとするも、耳カブをされ、力がなくなってしまう、姉様の為されるがままになってしまった。

この日、姉様の苛めのせいで体力が激減し、魂は少し抜けかけたため、学校を休まずに居られなくなりました。

姉様はルンルン気分、「近い内にまたきちゃうよお」と言つ言葉を残しお昼前に家を出て行つた。

「アハハハ、姉様、あんなになるんだ。」

その姿を思い出し、少し笑う僕の姿はパジャマはシワだらけになり、ボタンは外され、上の方の下着は外され、椅子にぼおつと座つていゝるといふ何かマニアが喜びそうな状態である。

「ルミの魂が抜けてる。」

弥美の弦きが聞こえてきたが聞き逃しておいた。

ルミでの登校

「はあ、此処まで学校に行く気が起きなくなるのは初めての事だなあ。」

姿見に映る自分は我が高校のセーター服に身を包んでいた。

「なんかヤダなあ。」

溜息を付き、ベッドに突っ伏した。

さて、その後ボクはそのまま自分の部屋に閉じこもっていようと思っていたのだが、弥美の侵入、強行により、学校に行く事になった。

…はあ。

視線が痛い。ボクを見るなり、生徒達は固まり、ボクが通り過ぎるのを黙って鑑賞していた。

「はあ。」

…もう、嫌だ。

さて、教室に入ってからボクの憂鬱気分は増すばかりであった。

名前も覚えていない女子生徒にキヤツキヤと玩ばれたり、傍から見れば羨ましいだろう光景だったであろうが、ボクにとってはテンションがいきなりエンジンの止まった飛行機並の憂鬱への急転直下状態である。

「皆、席に着け。」

救いの声にも聞こえた先生の搭乗の音が響いた。

「おっ、龍炎、来たのか。気分は如何？」

「早く早退したい気分です。」

「アハハハ、それは無理って物だね。」

「ですよー。」

棒読み同然で言う。

「まあ、そういう事だから龍炎が登校拒否になんない程度に遊べよ。」

『はい。』
遊ばれたくないです。

昼休み時

「はあ。」

「ホント、大変だね。リュウ君。」

昼食は弥美を含めた五人で食べる事にしている。勿論、武井を掃除用具入れに閉じ込めて。

「アハハハハ、まあねえ。」

「まあ、一週間ぐらいで飽きると思うし、それまで我慢してれば大丈夫だと思うよ。…武井を除いてね。」

「つつか、アイツ、如何したんだろうな？我が高の三大女子生徒には見向きもしないのに。」

「…ねえ、何となく思うんだけど。ルミってそれ以上の美的ランクじゃない？」

「ん、言われてみれば確かにそうかもしれないね。」

「やめてくれ、ボクの何かがはじけ飛ぶそんな事になったら。」

「確かに、男がそんな事になったらプライドっぽいのが吹き飛ぶな。」

「そういう物なの？」

「普通そうじゃね？女子の場合、同姓にカッコいいって言われたら凹まないか？」

「…言われてみれば。」

「それと似たようなもの。」

「……ホモって最悪だよな。」

「リュウ、いきなり何を言いだすんだ？」

「いや、地獄に堕ちて欲しい人間の顔が一瞬浮かんだから。」

「それ、誰？」

「ガチホモ兄貴。」

「「……え？」」「」

それだけ言い昼食を続行した。

「…あ、そういえば。リュウ君、体育どうするの？」

「……あ。」

「え？何の事？」

「着替え。」

「…ああ、成る程。」

ウチの学校、体育は合同なのである。男子は奇数クラス、女子は偶数クラスで着替えをするのである。

…では、ボクは何処で着替えれば良いのだろ？

「女子生徒が全員着替え終わってからじゃダメなのか？」

「絶対に合わないわよ。」

「それと、あの掃除用具入れの化け物の存在。」

右を見ると飛び跳ねながら徐々にこっちに接近してきていた。

「確かに。この男の存在だな。」

「取り敢えず着替え終わったら縛っておいてくれないか？」

「でもコイツなら関節外してでも行きそうだぞ。」

「…じゃあ無理だね。」

それだけ言い、その化け物の方に向かい元の指定位置に押し戻した。

「…あ、良い解決法見つけた。」

「ん？何だ？」

「ばつくれれば良いんだよ。」

「それはダメだと思うよ。」

「……もう、いつその事一緒に着替えれば良いんじゃない？」

「いや、それはちょっとボクの意識が途切れる可能性が…」

「じゃあ、もう無いよ。」

「やっぱすっぱかすしかないな。」

が、その後直ぐに冴島先生がやってきた。

「龍炎さん。ちょっと、一緒に来てくれるかな？」

「良いですよ。」

それだけ答え、先生の後をついていく。

連れて来られた場所はそれほど離れてない場所にある物置用の小部屋であつた。

「何ですか此処？」

「文化祭の時に荷物置き場にする物置、それとはいこれ。」

そう言つて小さな鍵を渡した。

「？」

「とりあえず、着替えの場所として貸すんだから変な事に使わないでよ。」

「はあ、分りました。…ありがとうございます。」
「そう言い鍵を受け取る。」

「へえ、良かったじゃない。」

「まあ、良かったには良かったけど。」

…なんでそこまで親切にしてくれるんだろ？

等と言う謎の抱えたまま午後の授業となった。

「ん？武井は如何した。」

五時限の授業の教師がそう言う。

「……あ。」

五人が一瞬にして後ろ振り向き、掃除用具入れを見る。

「ん？どうかしたのか？」

「あ、いえ、何でもないです。」

ボクが取り敢えず知らぬ顔で言う。

「ふむ、なら武井は無断欠席と。」

ガタガタ

全員して後ろの掃除用具入れを見る。

その後、勇気ある男子生徒により掃除用具入れからガムテープやロ―プでグルグル巻きにされた武井の救出に成功した。武井の意識はまるで二週間閉じ込められていたかのように朦朧としていた。

「ルミちゃん、何であそこまでなつてたのかな？」

「あれじゃね？女子を見る事出来なくて禁断症状みたいになったとか。」

「…ないない　いくら工口馬鹿でもそこまで行かないでしょだよねー。」

こうしてルミとしての登校第一回は恙無く終了した。

バカ水モ兄貴

「…日は堕ちても這い上がる。人は堕ちればそのまま。地獄を見てもそのまま。我が兄、死しても尚堕ちたまま。」

…クラス中ドン引き、我が詩、そこまで引かれる物か。

「ねえ、何さっきの詩、家族についての物だったよね？」

「ん？一応家族の事だけど。」

「ルミの兄ってどんななの？」

「…取り敢えず、顔はいい方、中身は馬鹿より最悪。」

ブー、ブー、ブー

「ん？…はい、もしもし。」

『りゅ、リユウ、助けてくれ、お兄ちゃん、死んじやう。』

「…その場でのたれ死ね。」

『待つてええ！！実の兄だよ！？』

「実の兄だからこそ、その場で死して土に還り人々に謝れ。生まれ
てきてゴメンと。」

『俺ってそんな存在価値なの！？』

「…ああ、地獄めぐりしてもマイナスのお釣りが返ってくるくらい
の。」

『……よし、今に見てるよ、リユウ、今すぐお前をだk』
取り敢えず切った。

「誰から？」

「記憶に残さなくて良い人から。」

その数時間後その男が現れた。

「で、あるからしてX＝4　3になるんです。」

数学の時間中、窓の外から何かが跳ねる音が聞こえてきた。

「……」

窓の方を見ると何かの登頂部が見え、そして消え、撥ねる音が聞こえまた見えるを繰り返してどんどんとその存在が確認できるようになっていった。

「……」

「おっ…リュウ…発見…だあ」

ふつつと湧き上がる衝動に俺は本能の赴くままに行動した。

先ず窓を開け、飛び上がってきたその男の頭にチョップを食らわし、全身全霊の拳の一撃を顔面陥没するくらいで打ち込んだ。

「二度と現れるな。そして死ぬ。地獄に堕ちろ、冥界に消える。我が前に現れしとき、汝土に還らず空に消える。」

鼻血と吐血で右腕と制服が赤く染まらした男はそのまま自由落下のスピードで落下した。

「……」

衝動をとまらし僕は先生に授業の再開を促し席に着いた。

下校時、トランポリンの膜を破り、地面にめり込んでいるあの男が居た。

「……」

とりあえず、近くにあったシャベルを使い、その男が入る位の穴を開け、その男その穴に突き落とし埋めた。

「安らかに眠れ、道を踏み間違えた龍炎流気よ。」

取り敢えず手を合わせ、そう呟いた。

ズガッ

右腕が現れた。

「フッフッフッフッフ…」

不気味な笑い声が近くになっていった。

「リュウよ、俺はまだ死なないぞ。お前を俺のものにするまでは！

！」

「…地獄に堕ちろ。ていうか、この世に痕跡を残さずに死ぬ。」

「そっいうなよ、弟よ。」

「地獄に堕ちれ。」

「なあ、ちよつと、うちに入れてくれないかな？」

「地獄に堕ちれ。」

「……頼む。」

「地獄に堕ちれ。」

「……グスッ。」

「天国行く直前で急転直下で地獄に堕ちれ。」

「何で俺の愛が分からないんだ?!」

「地獄に堕ちれ。」

数十分後、先ほどからずっと同じ事言っていたら凄く落ち込んだ感じで手を着いていた。

「うう、なんで俺の愛がお前には分からないんだ。」

「分りたくも無い。ガチホモの気持ちなぞ。百合以上に分りたくも無い。」

「薔薇と百合は似たものだぞ!？」

「BLよりGLの方が見てて楽しい。」

「なっ!？お前!異性愛より同性愛の方が良いのか!？」

「誰がそんな事言った?手言つかさっさと地獄に堕ちやがれこんの龍炎家の恥め。」

「うるしええよ!!地獄にだって天国があるんだよ!」

「開き直って反論してんじゃねえよ。つつか、何でこっち来た?答えによっちゃ、ヤーさんに頼んで南極に運んでもらうぞこらあ。」

「ヤーさん?お前何時からそんな人たちと仲良くなってるの?!うう、兄さん悲しいよ、弟がそんなになっちゃってるなんて。」

「誰が麻薬の売人と友達なるかボケエ。ヤースさんじゃ、ボケエ。運送会社の社長のヤスキさんじゃボケエ。」

「だったらそう言えや!」

「分れよ。そして地獄に堕ちろ。愛とは何かを学び直せこの野郎。」

「ふっ、これが俺の愛だ!」

「そう言い俺に抱き着こうとしてきた。」

「…一生植物人間にでも為ってる。」

接近してきた薔薇野郎の股間に蹴りをぶち込む。

「おおおおお！！！」

悶え始める薔薇野郎の胸倉を掴みのぐるぐると回し始める。

「校舎のシミでもなってるや。」

手を離すと薔薇野郎は吹き飛び校舎の壁に激突し動かなくなった。

「一生寝てるや。」

それだけ言い、近くに置いておいたバッグを取り近くで固まっていた弥美に声を帰る事にした。

「ねえ、ルミイ。」

ちよつとおどおどした感じに声を掛ける弥美

「ん？如何した？」

「さっきのルミ恐かった。」

「いや、ゴメン。あの兄貴見ると殺さなければいけない感じがしたから。」

「ふん。」

それだけ答える。その数秒後、隣から寄りかかれる感じがした。

「ルミちゃんの時はあんなにならないでね。」

「善処しておくよ。」

「そうなの…ところで、薔薇って何？」

「……ん？」

「薔薇って何って聞いたの。」

「男性の同性愛の事。ウチの兄貴がそれなんだ。」

「ふん。…ねえ、百合を見てて楽しいって如何言う事？」

「ん？別に深い意味は無いけど。男性の同性愛より女性の同性愛の方が何か仲良しって感じがしないか？やられてる側から見ると。」

「ん、まあ、楽しいね。ルミちゃんの辱めるのは」

弥美の笑みはとても優しくたったけと言ってる事は僕の身に危険を感じる事だったがその事は如何でもよくなった。

帰宅後直ぐに玄関の鍵やその他の玄関の鍵を閉め、夕食を早く終わらす。

「よし、とりあえず。弥美、一応鍵を閉めておけ。もしものためだ。」

「はあい。」

「良しでは、解散。」

「解散！」

自室に入り、トラップの調整をする。

殺傷指定しておかないとまた潜り込まれる…明日になっていたらそれこそ最悪のバッドエンドになってしまいます。

ヴー、ヴー、ヴー

「はい、もしもし。」

『ヤッホー。』

「ああ、姉様、何の用ですか？」

『いやあ、薔薇君見かけなかったかなあって。』

「……いえ、知りません。というか薔薇君で誰でしたっけ？」

『リュウ、記憶抹消しちゃダメでしょ？』

「ですが、あれが兄貴とは思いたくありません。」

『ふーん、じゃあ会ったんだ。』

「三回ほど殺しました。」

『ふむ、それで今何してたの？』

「トラップの確認と殺傷設定への調整です。」

『アハハハハ。』

「ところであの脳内水飴兄貴が如何したんですか？」

『何か逃げ出しちゃったのよ。仕事放つといて。ねえ、もし捕まえる事出来たら電話してくれない？捕獲用車迎えに行くから。』

「はい、分かりました。出来るだけやっておきますよ。」

『ウフフフ、お願いね。リュウ君』

ブツ、ツー、ツー

「……あ、宿題。」

罨のスイッチを消し机に向かいやり始めた。

午前一時前、宿題は終わった。

「はあ、終わった。」

カバンに道具を入れて。明日に備えた。

その刹那

ドクン

「グウッ」

ドクンドクン

「グウウッ」

ドクンドクンドクン

「たく、早めに、寝ておけば良かった。アアアアアア!」
そして気を失った。

気が付き体を起き上がらすと重心がずれていた。それと、胸が服に押さえつけられ服が伸びかけていた。

…さてと、寝るか。

少しボタンを外し胸を圧縮から開放する、その状態で布団の中に潜り込み畚のスイッチを入れ、電気を消した。

何時ものように目覚ましがなりボクは起きる。

寝惚け眼で目覚ましを止めに行く。

シュッ、バサ!、ガッ。

「……フエ?」

変な音のした方向を見るとクナイが床に突き刺さっていた。

「…あ、トラップ。」

そう考え直ぐに目覚ましを止め、トラップのスイッチを消した。

「…フワア。」

とりあえず今日は休日なので、直ぐに着替える事にした。

「…フワア。」

…やっぱり二三時間くらいの睡眠じゃ疲れ取れないなあ。
そんな事を考えながら自室から出て、朝食を作る事にした。

「……」

自室から出るとそこには寝袋に身を包んだあの男がいた。

「……」

ワタシはとりあえず、その糞虫を縛り、自宅近くの電信柱に逆さづりしておいた。

「……よしっ。」

グース力寝ている糞虫を腕組みしてみた後に自宅に戻り朝食を作り出した。

「ハワワアア。」

「おはよう、早いね。」

「ん？おはよう。……え？！」

「如何したの？」

「ルミちゃん、髪如何したの？」

「髪？」

寝惚け眼で髪の毛を触つてみると腰に届きそうだった長さが十センチほど短くなり胸のところで乱雑に切られた状態になっていた。

「……」

アワワワワワワ…

「ルミちゃん？」

何で？如何して！？ワタシの髪があ。

「……あ。」

…そういえばクナイ飛んできた時に…

考える前に動いた自室に行き、床を見るとある一点にワタシの髪がばっさりと落ちていた。

「……グスッ。」

「え？ルミちゃん！？」

「…フエッ？如何したの？」

意識がはつきりし目の前を見るとボクのっぽい髪の毛がばっさり切られて落ちていた。

…な、なんて事だ。これではポニテがショートになってしまっ。

「……あれ？…そういえば、誰か居た気が…」

「…ねえ、ルミちゃん、ワタシに挨拶するまで何してたの？」

「……何してたっけ？」

小首を傾げる。

「えっ、でも着替えてるし。」

「…寝惚けてたのかな？」

「寝惚けてて着替えられるものかな？」

「でも、出来ちゃったしね。」

「…あれ？そういえば…蓑虫。」

「蓑虫？」

えっと、確か外の電子柱の所に。

そう思いボクはテクテクと自宅の外へ出た。

「いた、蓑虫。」

「確かに蓑虫ね。…え？もしかしてあれも寝惚けてやったの？」

「なのかなあ？とりあえず、姉様ねえさまに電話しておこう。」

電話を掛けると直ぐに捕獲隊がやってきて兄貴は補導されていた。

「フワアア。」

「…眠そうだね。」

「昨日深夜近くまで起きてたし、気絶して寝ちゃってたし。」

「気絶？」

「発作。」

「ああ、それね。」

その日、ボクの髪は長いシッポではなく短いシッポが付いていた。

我が最初の友人

今日は珍しく目覚ましではなく自力で起きた。

「……ん、今日は日が照ってるなあ。」

時計を見ると三時五分位で機能停止していた。

「……へ?!」

携帯の時計を確認

8:45をデジタル時計が示していた。

「な……!?!?!?!」

とりあえずさつさと着替えを済まし、弥美を叩き起こし、全速力で学校に向かった。昼食用の財布を持参して。

「りゅ、リュウ、引つ張らないでよ!」

「それでもしないと間に合わないだろう?」

「痛いよ!」

「……じゃ、仕方ないか。」

そう思い、とりあえず弥美の前で止まる。

「フエ?!」

減速できずに弥美がぶつかる。少し体を傾け、弥美が背中に乗つかのを確認し、弥美の足を抱え猛ダッシュ。

「……フエツ?!」

「あんまり動くなよ。て言うか動いたら怪我じゃ済まないぞお。」

「フヌウウ。」

で、十数分到着

「もう、バカバカバカバカ……」

そう嘆きながら連続で殴り続ける弥美。

「遅くなるよりはマシだろ?」

「あんな事されるくらいなら遅刻したほうがマシだあ!」

先程よりも威力上げながら殴り続ける。

とりあえず、教室の後ろのドアを開け入る。

「すいませえん、寝坊しましたあ。」

「龍炎君遅れてくるのは良いんだけど何で殴られてるのかな？」

「ちよつとした諸事情です。気にしないで下さい。」

そう言い、先生の隣にいる女子生徒が何か驚愕の顔を浮かべていた。
「あれ？先生、転校生ですか？これはまた何か危ないシチュウ状態ですね。」

「龍炎君、そういう発言は控えてください。では、皆さんにはもう紹介したんですけど龍炎君とヤアミンに紹介するねフランカ・ミリシヤリアさん。でも、アメリカに居たのは一才までだから日本語の方が上手いんだよ。」

「ミリシヤリア？……あ。」

ボクはゆつくりとその蒼髪金眼の女性指差した。

「……やっぱり。」

女性も同じ様な仕草をし出した。

「ミィシャ？」「へビ？」

「やっぱりへビだ！」

「な、何で此処に？」

「ん」と、暇だったから来てみた！」

「いや、来てみたじゃなくて。」

「おんやあ？二人とも知り合いですか？」

「ああ、まあな。小学一年くらいだったけか？」

「そうそう、ところで何で引越しちゃったの？」

「まあ、あれだ。本館が欠陥だったから廃棄ついでに別荘に引越して感じた。」

「あれ別荘なの？普通の家でしょ？」

「あのな、隣の家とか見てみるよ。」

「ん、おつ、成る程お。」

「お前、何時から箱入り娘化したんだ？」

「幼稚園くらいから！エヘヘヘ 凄いでしょ？」

「凄くないよ。凄くは。」

このミーシャ、ボクの最初の友人である。昔と変わっていない所はとりあえず胸で目測まな板よりあるくらいである。

「ところで、殴りから筆箱で叩く事に変えている後ろの女の子は誰？」

「ああ、居候。」

「へえ、居候なんだ。」

平等に沈黙。

『え？それだけ？』

「それだけとは？」

『普通あるでしょ？嫉妬とかそういう物が。』

「無いですよ。だって、友達として好きだから。愛しているって言う意味の好きは持っていないですよ。」

という事だと思って普通に紹介しておきました。

『なんだあ、折角泥沼の三角関係見ようと思ったのに。』

「ゴメンなさいね。」

そう言い少し傾きお辞儀をするミーシャ。

いや、僕的にはそれで良いんだ恋愛に関しては普通を望んでいるから。

「ところで弥美よ、何時まで叩いているんだ。」

「…バカバカバカバカ」

筆箱からフライパンに物が変わり悲しく響き渡っていた。

昼食時

「ええ？！そんな事したの？へびって変わらないね。前にワタシが怪我した時もそうやって運んでくれなかったっけ？」

「ああ、確かにしたぞ。」

「小学一年と高校じゃない違うのよ！」

「まあまあ、ヤミ、良いじゃないおんぶ位、お姫様抱っこよりとはマシでしょ？」

「…！何ふざけた事言ってるのよ？」

「やろうと思っただけで如何考えても早く行けそうに無いので止めた。」

「やろうと思うな！」

次の瞬間、頭に凄まじい激痛がはしった。

「……弥美よ、幾らなんでも教卓はダメだろ？」

「ルミだから良いのよ！」

「アハハハ、そういえば、お姉さんは如何してるの？まだ、服従してるの？」

「……え？」「」「」

「ミーシャ、言い方可笑しい、服従してるんじゃない、こき使われてるんだ。まあ、一応元気だよ。」

「へえ、そうなんだ。……てつきり、小さな小部屋で弄ばれてるのかなど。」

「ミーシャ、そう言う可笑しな所だけ勉強するのは止めような？」

「ん、じゃそうする」

「……なんかさ、仲良いつていうレベル越えてる気がするんだが。」

「……いやあ、あれだ初めて知り合った時何にも知らない田舎娘みたいな奴だったからコイツの知らない事を僕が少なからず教えたら言い方可笑しいけど懐いた。」

「ん、ま、そんな感じだねえ。」

ポケーっとした感じで答えるミーシャ。

「ところで、何でミーシャなの？ミリシャじゃなくて。」

「コイツ、昔は舌足らずで、ミリシャリアをミイシャリアって言うてたから。それをそのまま聞いてミーシャって呼んでるだけの事。」

「ムウ、そこまでじゃない！ちゃんとやってたもん！」

「じゃあさ、ミーシャ、ミリシャ、ミリシャリアって言うてみる。」

「ふん、簡単だよ！ミーシャ、ミリシャ、ミイシャリュア、ミーシャ、ミミシャ、ミイシャリア！」

「ほらな？」

「ハウウ。」

「ハフウ、可愛いから抱きしめちゃう！」

普礼はミーシャの後ろに回ると抱きしめた。

「フワッ?!」

「フフッ、可愛い声 ハムッ」

普礼はミーシャのスキを着く感じで耳カプをした

「フワヤッ。」

… やっぱ、やられるより見てたほうが面白いなあ。

そんな事を考えながら購買のパンを食べる。

次の日、いつも通りルミ化するボク。昨日目覚ましの電池を換えておいたので寝坊する事は無かった。

いつも通り教室に入る。ミーシャが居ない事を確認し席に着いた。ホームルーム六分前にミーシャがやってきた。

「あれ? あれ?」

ボクの居る位置と記憶を照らし合わせているみたいだ。

「ん」と、あれ? 何で、へビの所に座ってるの?」

そう聞くミーシャに

「此処が席だから座ってるんだ。」

と普通に答える。

「……………?」

混乱し始めるミーシャ。それを微笑ましく見るボク。

ガーン

突如、鉄板のようなもので頭をぶつ叩かれる。

「何、遊んでるのよ? ルミちゃん。」

「ルミちゃん?」

「ん? 普通にミーシャの表情見て面白がってたただけだが。」

「?????」

初対面のはずなのにあだ名を知ってるという疑問で頭の上に?マークがクルクル回っている。それをまた微笑ましく見るボク。

「はあい、五分前くらい前だけどホームルーム始めちゃうよ。おっ、

龍炎さん、今日は遅れなかったね。」

「二日連続で遅刻はしませんよ。」

「????????」

「マークが多くなり猛スピードで回りだしている。

「?フランカさぁん、如何したの?」

「ルミのせいで混乱してるんでえす。」

混乱の原因のボクはミーシャを眺めてニコニコと笑っていた。

数分後

「へえ、そんな事あったんだあ。」

謎が解けて輝かしい笑顔でそういうミーシャ。

「…もう少し見ていたかったのになあ。」

ガッーーン

「人を玩具みたいにするな!」

「……だって、何時見ても面白いから。」

「…それに弥美とは違う可愛さあるし。」

「…フムウ、何か羨ましいなあ。」

「ん?」

「これ。」

そう言いボクの胸を指した。

「可愛いし大きいし。何か羨ましいなあ。」

「ふん。」

「何で何時もの言わないの?」

弥美が不機嫌そうに尋ねる。

「とりあえず、反論する気なくなったし。それと、ミーシャに言われると本当に羨ましがれてる風にしか聞こえないから。他のは嫌味とも取れるから。」

そう言いながら髪の毛先を弄っていた。

「むう、反論出来ないのは何でかな?」

「だって、フランちゃんて純粹だしね。」

墓参り（前書き）

過去話です。

更新遅れてすみません。

墓参り

『少し出かけてくる。』

置いてある物は失敗作、食べたければ食べても良い。 流巳より。

『
そんな置手紙を六分の一だけ切ったチーズケーキを残し流巳は家から出たのは夏休みが始まり二日しか経ってないある日の事。』

「……………」

流巳はある墓の前に薔薇の花束とチーズケーキを置き手を合わせていた。

「あの、失礼。」

「…なんででしょうか？」

「この墓の人とお知り合いですか？その…日夏利ひかりさんの。」

「……そんな者です。」

考えるような素振りを見せずに少し間を開けそうだった。

「あの、では名前は？」

「何故、見ず知らずの人にそこまで聞かれなければいけないのですか？」

「あ、その日夏利さんからの遺言書の人を探しておりまして。」

「？」

「おんやあ？新井出さんじゃないですか？」

太った中年の男性が花束を持ってやって来た。

「あつ、刑事さん。」

「おや？そちらにいるお嬢さんは誰ですか？」

「…知り合いです。」

「ほう、知り合い…ただの知り合いなんですか？」

「ええ。」

「そうですね。てつきり、ヒカリさんが発見された時に一緒にいた

人かと思いましたよ。」

「…何故そう思いますか？」

「フッフーン 他の人は騙せても私には騙せませんよ。龍炎さん。」

「刑事さん、誰かと勘違い為されてませんか？ボクはその龍炎君と言う方とは知り合いでは…」

「おや？可笑しいですね。貴女、何で龍炎さんと私は仰ったのにそれで男の人だと判断されたんですか？」

「…とりあえず、この日ぐらいはそつとして置いてくれませんか？大岩さん。」

「フーン、そういう訳にもいきませんね。龍炎さん。貴女にはまだ聞いていない事がありますので。」

「今日だけはそつとして置いてくれませんか？警察の方に言いますよ。」

「ナツハハハ、行き過ぎておりませんよ？現に私はあの事件の事情聴取依頼ですよあなたに会つのは。」

「ええ、知ってますよ。だって、貴方は自分の部下にボクをつけさせていますから。」

「ナツハツハツハ、やっぱり世間的に公表されてない貴方の情報を警察が掴んでる訳ないですもんね。」

「あとう、遺言の方はこの人で間違いないんでしょうか？」

「え？ええ、そうですよ。」

「遺言、って何の事ですか？」

「ヒカリさんの遺体の中からみつかったコインロッカーの鍵、それと合つ駅のコインロッカーに入ってたんですよ。遺言書が。」

「…：…：やっぱり、遅かれ早かれこうなる事分かってたんですね。ヒカリさん。」

「遅かれ早かれ？それは一体…」

「新撰組って言えば分かりますよね？大岩さんなら。」

「…：ええ、解ってますよ。貴方方が結成した義賊者の集まりですね。」

「……まあ、言い方は悪いですけどそういう風になってしまいました。あの、居水のせいだな。」

「何が起きたんですか龍炎さん？教えてください！ヒカリさんのためにも。」

「……来年。…話します。弁護士さん。」

「はい、何でしょうか？」

「来年まで待つてもらえないでしょうか？本当の自分でその遺言を聞きたいんです。」

「…解りました。では、一年後この場所で。」

弁護士は軽くお辞儀を去っていった。

「さてと龍炎さん、私お腹空いたんでそれ食べても良いですか？」

「食べても良いですけど。ヒカリさんの事思い出して作っただけで間違つて砂糖と一緒に塩も入れてしまいましたのでとても食べられたものじゃないですよ。」

「…そうですね。あつ、クリスマスの時にお会い出来たらケーキ作つてくれませんか？」

「あれ？大岩さん、家族居たんじゃなかったんですか？」

「あれはフェイクですよ。」

「だろうと思いました。」

「それと、前にも言いましたけど。私は大岩じゃなくて大山です。大山石動です。名詞の誤植のままで呼ばないで下さい。」

「そうですね。では、また。」

流巳はそう言い、家に帰った。

「ええ、また。」

大山さんは手を振り、その姿を見送った。

「…貴方も困った人ですね。あんなに良い人なのに十八歳の誕生日にビックリさせるまでお願いしますだなんて。4〜5年ぶりの貴方からのプレゼントがあれば彼も驚愕しますよ。まあ、Dさんも…でしょうけど。」

苦笑気味に日夏利さんの墓にそう言う大山さん。

文化祭（前書き）

その前にも体育祭があったのだがまあ、それは普通に終わった事だしどうでも良い。普通に終わったと言うのはルミでやったわけではないので誰もが憤慨をしていたがまあこの際は如何でも良い、今回話すのは僕にとって今年最大の厄災である。

文化祭

「では、今回の文化祭のクラスの出し物は喫茶店と言う事で良いですね。続いては分担について決めたいと思います。」

「はい、とりあえず無条件でリュウを表に出す事に賛成します。」

『出来ればメイドで!』

男子の大半がそう宣言する。

「待て、何故そうなる?」

「フツフツ、リュウよ。もう二度と体育祭の二の舞はふませないぞ。」

「そんなにルミの走る姿が見たかったのか。」

「そしてそれを売り捌く!!!!」

「…殺して良いか?」

「まあまあ、ですがその日はそうなっているのですか?」

「ふっ、俺の計算に狂いは無い!その日は絶対ルミちゃんdグワフツ!!!?」

大きめの辞書を武井の側頭部に命中させる。

「お前にだけはちゃん付けされたくないだとルミが。」

「えっと、とりあえず賛成の人は?」

クラスの大半の手を上げた。まあ予想が出来てたから大声を上げなかった。

「えっと、リュウはそれで良いかな?」

「…まあ、良いぞ。」

クラス中から歓喜の声が上がった。

「だが、一つ条件がある。」

『え?』

それだけ言い席を立ち黒板に向かいその条件を書き出す。

カメラ持参、五百円

撮影一回、二千元（ルミ撮影五千。微妙に入れた場合は三千。）

ビデオカメラ、六千

隠し撮り、捕まえた時点で一万

支持されての撮影は支持した奴から十万（武井の場合は五十万×指示をした人数分。）

「これをメニューに入れてもらいます。出なければ僕は裏方に回ります。」

クラス中から不満の声が垂れる。

「よし、今不満言った奴等前に出る殴り飛ばしてやる。」

『異議ありませーん。』

「最初からそうしておけ。とりあえずこれでも譲歩してる方だぞ。」

『これで譲歩なんですか？大佐。』

「まあ、そつだ隠し撮りは十万取っても良い物なんだぞ。」

『横暴だね。』

「如何とでも言え。」

とりあえずこうしないと暴動が起きそうだったしな。

「ところでさ、リュウ、お前大丈夫が？」

「何が？」

「メイド服。」

「…な！？それを忘れていた！？」

「……何とかなると思う。」

「絶対忘れてたよな？」

「いや、全然。」

昼休み時

「メイド服、何でそんな物を忘れていたんだ僕はあ…」

「やっぱり忘れていたんか。」

「通りで可笑しいと思った。着るにしてみれば譲歩しすぎだなあと思ってたのよ。」

「はあ、まあ良いや。」

「良いのかよ。」

「んゝ、ルミちゃんがメイド服着たら…私抱きついちゃうかもね。」

「ミーシャ、そんな事したら理性が吹き飛ぶ。」

「アハハハ、吹き飛んじゃえー」

…何か途轍もなく頭を撫でたくなる。

で、次の日の放課後。

「…早いな、準備するの。」

「へへエン、リュウ君にはメイド道を教え込まなければならぬのだよ！」

「淒く、現実では役に立ちそうに無いな。」

「その前に言葉遣いをどうにかしなくては。」

「……ああ、それ多分大丈夫だと思うぞ。」

「？如何いう事？」

それだけ答え、教室の柱に頭を思いっきりぶつける。

「！！！？」

精神ルミ化。

「…やつぱり、これ痛い。」

「ルミちゃん？何してるの？」

「だから言ったよね？それ大丈夫って。」

「？」

クラス全員が首を傾げる。

ワタシはそれをみてクスリと笑い。

「そんなに可笑しいですかね？今の行動って。」

「……」

一瞬にして言動が変わったので啞然とする皆さん。

んゝ、そんなに可笑しいのかな？

「あの、そろそろ始めないと時間なくなっちゃっよ？」

「あ、そうだね。…ていうか、リュウ君上手いじゃない。」

その言葉にワタシはクスリと笑う。

「残念ながら、ワタシは流已では無いよ。正真正銘のルミだよ。」

「ハ？」

「えっと、つまりルミちゃんの人格っていう事？」

「ええ、そういう事だよ。」

そう言い微笑むと皆さんはたじろぐ。

「そんなに可笑しいかな？」

コクコクと頷くクラスの皆様。

「フムウ、如何したら慣れていただけるのかなあ？」

ポニテの毛先をくるくる回しながら考える。

その後、直ぐに計画変更しワタシのメイド化が始まったのだけど。

「…何かやる気がなくなってきた。」

「？何でですか？お嬢様。」

敬語で尋ねてみる。

「上手すぎるんだもん！！これじゃ教える気なくなってくるのよ！」

「そう言いましても、ワタシはリュウ君とは違い元から女の子です

し。可笑しな恥ずかしさはありませんから。」

「ムウ、口答えする子はお仕置きだよ！」

「横暴ですよお嬢様。ワタシは正論を言っただけですよ。」

「むう、お仕置きお仕置きよ！罰として文化祭はネコミミ着用！」

「フエ！？それは嫌です。それをやるのならメニュー表の金額上げますよ。」

『それだけで良いんだ。』

「全メニューの金額ですよ。」

『それはやりすぎだあ！』

「でも、馬鹿な男連中はウジャウジャやって来ますよ。」

『この人、自分の中のもう一人が男である事忘れてるよ。』

「リュウ君は馬鹿ではありませんよ。」

で、その後やる気をなくしたフレイちゃんは復活しなかったのだ。

「じゃあ、そろそろ帰りますねー。」
ワタシはそう言い、壁に頭をぶつけた。

精神流巴化

「あれ？ボク何時間ルミになつてたんだ？」

『かれこれ二時間ほど。』

「おお。で、普礼は何落ち込んでるんだ？」

「もう一人の自分に聞いてみて。」

「？まあ、そうするわ。で、何でこんなのがついているんだ？」

カチューシャのほかに違和感を感じたので触つてみた所ネコミミであつた。

「まあ、諸事情だ。」

其れから数日が経ち、文化祭を三日後に控えた朝の事。

「ん？手紙？」

ポストの中に一通の手紙が入っていた。

「まあ、後で確認しよう。」

と、考え学校に向かった。

で、学校に着き、手紙の内容を確認し僕は固まった。

「如何したの？」

「……リュウ君へ、お姉ちゃんから聞いたよ。リュウ君が面白い事になってるっぽいので文化祭の時にそっちに帰ります。そしていっぱい愛でたいです。by可愛くなつた我が子の母より。」

「え？お母さん来るの？良かったじゃない！」

「良くねえよ。普通の格好で会うのならまだしも何でメイド服状態で会わんといけないのだよ。はあ、やる気が起きない。」

で、文化祭前日。

ルミ化するのは文化祭の二日前なのでその時最終チェックを終わら

している僕は暇なので校内を歩いていた。

で、食事係の方を見に行く事にした。

調理室の中を見ると他の学年の人たちも混じって自分達の料理を作っていた。

「おつ、リュウ。」

「よお、調子はどうだ？」

「まあ見ての通りボロボロ。」

多分、喫茶用のサンドイッチなんだろうが切った時の力が強すぎて中から具材がはみ出していた。もう一つは：何だこれ？某突っ込みだけの影薄いメガネ君の姉の可愛そうな玉子焼き上の焦げた物がドンと置いてあった。

「アララ。」

「なあ、コツとか教えてくれないか？」

「コツねえ、とりあえずサンドイッチは力入れすぎないように切れば良いと思う。振り下ろす感じではなく後ろに引く感じで。」

「おお、成る程。」

「で、質問なんだが、この可愛そうな何かは何だ？」

「カステラ。」

「……え？今何て言った？」

「カステラって言った。」

「これが、カステラ？有り得ない。此処まで焦がす事は僕には出来んぞ。つか、したら姉貴に叩き殺される。」

「なあ、何がいけなかったんだ？」

「これは、僕がお手本見せたほうが早いと思うな。」

そう言い、手を洗い。エプロン着用し、作り始める。

一時間後。

「こんな感じだ。」

これを戻したらこんな感じになりました的な比較で隣においてみた。
『おー。』

「……お前ら、ちゃんと覚えたよな？」

『イエッサー!』

「んじゃあ、これ持っていくわ。耳の分欲しければ喰って良いぞ。僕は甘すぎて喰わないけど。」

それだけ言い、切り分けたカステラを大皿に置き教室に持っていた。

で教室の前に到着、一応ノックを確認。

「おい、入っても大丈夫か？」

「OKOK、誰も着替えてないよお。」

で、中に入ると教室の飾りつけも終わっており中にはいまだ練習中の接客の人たちがいた。

「あれ？それ如何したの？」

「差し入れみたいな物だ。食事係のほうが悪かったんで教えついでに作ったのを持ってきた。」

「へえ、という事はこれリュウ君が作ったの？上手いね。」

「まあな、姉貴の注文に答えていたらレパートリーが増えた。」
等と話してる間にもカステラは一個また一個と女子のお腹の中へと消えていった。

「これ本当においしいね。」

「うん、確かに。」

等という賞賛の言葉に僕は一瞬口を緩ませた。

さて、早くも当日である。

ボクは着替えて教室に向かい開店する前に壁に頭をぶつけた。

精神ルミ化

「うう、痛い。」

リュウ君幾らなんでも痛すぎるよお。

「ルミちゃん、頑張ろうね？」

「はい。」

さて、開店と同時に行列が出来た。

数時間しても行列は途切れる事はなく、午前中だけで大黒字となつてしまった。

… そんなに人気あるのかな？ワタシ。

その事に核心を付けられたのはワタシのシフトが終わるのと同時に長蛇の列が半分くらいになったのである。

… さてと、バッジの方もなくなっちゃったしそろそろ始めようか。そう思い、物置部屋の鍵を開け、女子制服に着替え、壁に頭をぶつける。

精神流已化

とりあえず物置部屋に設置した、ドクター作盗聴器型バッジの電波をキャッチする機械を作動させる。

「さてと、盗聴器の電波良好。えつと先ずはチャンネル1から調べてみるか。」

ポチッとボタンの1を押し、エンターキーを押す。

『ガガザビーふむふむ、良し良しちゃんと撮れているな。… はい、バッチリです。それで報酬は？… 報酬？ちゃんと撮れてないじゃない。これではメイドルミの写真集が完成しないじゃないか。』

… 武井、五十万

で、次々と回していくと次から次へと武井のしもべ君たちが増えていった。

「えつと… 千二百五十万。よし、徴収しに行こう。」

チャンネル1が話していた場所に急行する。

「よし、よし。これで大もうけできるぞお。」

「何で大儲け出来るんですか？」

「そりゃあ、もちろん、ルミちゃんしゃし、ん、しゅっ…」

「へえ、どんなものですかボクにも見して下さい。」

「な… こ… だ？」

「ん、何故此处が分ったんだ？って言ったんですか？ん、言いましたよね？盗撮、ならびにそれを指示した奴のは罰金つて。えっ

と、こつちで調べられた限りでは千二百五十万円になります。」

「……」

ガタガタと揺れ出す、武井の体から大量のSDカードが出てきた。

「没収、没収。これで罰金は五千に減らします。今日中に払ってください。」

「ちつ、何でバレたかなあ？」

そう言い財布から樋口さんを一枚出した。

「こつちも仕事なのでな。」

そう言い、樋口さんをポケットの中に押し込んだ。

「では、またのお仕事お待ちします。」

軽く会釈をしその場を去った。

「さてと、盗聴器のシステムが壊れるまであと一分か。」

「へえ、随分と可愛くなってるねえ。ボス。」

男の声が先ほど通過した曲がり角より聞こえてきた。

「…山見か。」

「ええ、そうですね。」

「何か用があるのか？」

「ええ、団についての事です。」

「何か問題でも起きたのか？」

「まあ、そんな所です。実は右の奴等が最近ちょっかいを出してきてるんです。」

「…あんまり良い話しではないな。だが、何で右の奴等なんだ？あいつら最弱じゃなかったっけか？」

「ええ、でも噂によればでっかいパトロンがついたらしいんすよ。」

「パトロンね。まあ、あまり苛めない程度で遊んでやりな。俺が許可する。」

「感謝しますぜ。新ボスの方は位の高さにへっぴり腰なんですよ。」

「だったら、お前がやれば良かったんじゃないか？」

「とんでもない。あつしにはボスの後を継ぐなんて事は到底出来ませんよ。」

「たく、そんな後ろ腰だから若いのにやられてしまうんだぞ。」

「ハハハ、違いありません。まあ、楽しい高校生活を楽しんでくださいよ、ボス。」

「ああ、お前もな。」

「あはは、あつしには無理ですよ。ボスみたいに器用な人間では無いですからね。」

そう言い山見は去っていった。

「たく、変わらないな。」

「ホント、貴方は外見以外何も変わっておりませんね。」

「そうか？俺にしてみれば変わってると思うが。」

「いいえ、全然。僕からしてみれば少し落ち着きは増しましたが。」

それでも、自分の中の猛獣を時々放さないと理性が保っておけないようです。」

「お前こそ、前よりは毒舌が増えたんじゃないのか？有利。」

「ご冗談を。僕何時でも貴方の事を嫌っておりましたよ。僕より遅く入ったのに僕より早くボスの座に付き、突然僕の前から姿を消した。貴方はいつも僕のイラつく事しかしてこなかったからですよ。」

「それはすまなかったな。何なら今勝負するか？」

「遠慮しておきますよ。僕が勝負したいのは弱い貴方ではなく死神龍です。」

「あっそう。」

それだけ答え奴から遠ざかった。

さて、樋口さんをポケットに入れた僕は模擬店で使うわけでもなく近くのスーパーに行き材料を買っていった。

「まあこんなもんだろ。」

さてと、で、調理室に到着するもはやくも閉会式中なので誰もいない。

「まあ、その方がやりやすいしな。」

で、二時間後

「よし、出来た。甘さはどうかな？」

一つ食べる。ふむ、上出来上出来

ガラガラガラ

「あつ、やっと見つけたあ。」

ミーシャの声が聞こえたので見ると、普礼、由美、芳賀、弥美それとミーシャがいた。

「よお、お前ら食べるか?」

そう言いクツキーを指す。

「そんな事より早く来なさいよ!」

そう言い弥美はボクの左手を掴み走り出した。

「フエ?」

引つ張られやってきたのは我が教室。

「ヤッホー。連れて来たよ!」

「…なつ?!」

今日の前にいるのは母さんと親父である。

「ヤッホー リユウ君」

母さん、ノリが可笑しいよ。

「ふむう、研究のしがいがあるな。」

親父、人物の息子を実験体にならないで。

「それにしても可愛い。ギュ〜ってしたくなっちゃう。ギュ〜つて。」

母さんはそう言いながら前から抱きついてきた。

「あれ?ワタシと同じくらい?ワア、凄い凄い 成長したら大きくなるのかな?かな?」

しなくて良いです。肩が痛いので。

「あの、母さん、そろそろ離れてくれるかな?」

「え〜?もうちょっとこうしてたいよお」

「身長差を考えて。息がしにくい。」

母さんの胸で。

「あつ、本当だあ でも、もうちょっとこうしてるう。」
「
と言い母さんは抱きしめる力を少し上げた。」

「母さん、終わったら迎えに来るから。」

「あ、はい。」

「リユウ。」

「ん？」

「死ぬなよ。」

こんな事で死にたくはありません。

小一時間後、母さんはやっとボクを解放してくれた後直ぐに「お正月また帰ってきちゃうよ！それまでじゃあねえ」と言い去っていった。

「凄いい母さんだね。」

「ああ、ちよつと相手を気絶させるくらいの抱き締め方するときもある。」

「じゃあ、今のは？」

「まだ良い方。」

その後、クッキーの事を思い出し調理室に戻り教室に持って帰り皆に振舞った。

「へえ、武井の罰金クッキーなんだ。残りは？」

「とりあえず、収入の方にまわしておく。」

「それにしても美味しいね。ねえ、昨日カステラと一緒にレシピ教えてよ。」

「良いよ。」

「え？じゃあ、あたしにも教えて。」

と言う声が女子生徒陣から次々と上がった。

仕方ないのでクッキーの材料とカステラの材料をもう一度買ってきて、調理室を使って教えてあげた。

冬休み（前書き）

物語は過去へと誘われる。

冬休み

「フワアア…うう、寒い。」

現在十二月冬休み中である。そして過去最高の積雪量である。

「…雪かきするか。」

服を着替え、コートを着込み外に出た。

「うわぁ、凄い量。」

「アー、アー」

すると雪の中から烏の鳴き声が聞こえてきた。

「ん？」

雪がもそもそと動き出し、上の方から白い鳥が現れた。

「アー、アー」

雪の中を埋れながらこちらにやってきた。その白い鳥は…

「ハク？」

「アー アー」

正解だと言わんばかりに鳴く烏に僕は見覚えがある。

「ハク、如何した？」

僕はそう尋ねるとハクは少し羽ばたき、僕の肩に留まった。

「寒かっただろ？中入るか？」

僕はハクの冷たい小さな頭を撫でる。

「アー」

大きく鳴き僕の指を甘噛みする。

僕はその行動を微笑ましく見て家の中に入った。

とりあえず、ホットタオル（三十度くらい）をハクの体に巻いてあげた。

「」

ハクは気持ち良いの眼をとろんとさせて、眠り始めた。

「さてと、雪かきは後で良いか。朝食朝食。」

とりあえず昨日の残りのビーフシチューを暖めなおした。

で、気がつくともう七時になりそうだったので弥美を起こした。

「フワ…あ？なにこのハトっぽい鳥？！」

「僕の友達。」

「友達？」

「白鳥っていううちの親父がなんかの研究用にDNA弄くって作った鳥。とりあえず、色が白いからハクって呼んでる。」

ハクは近くで弥美が五月蠅くしていたためかせっかく気持ちよく寝ていたのに起きてしまっていた。

「ア〜」

タオルを嘴を使い自分から剥がすと近くに置いてある観葉植物の枝に留まった。

「賢いね。」

「まあ、カラスだし。」

そう言いながら、ビーフシチューを皿に盛り付け、テーブルに運んだ。

「ア〜、ア〜」

ハクは二回鳴き僕の近くまで飛んできて右足を上げたするとそこには小さな包みがあった。

「ん？母さんからかな？」

包みを開けると小さな紙が入っていた。その紙にはこう書いてあった。

『リュウ君とヤミちゃんへ、ごめんねえ、今年の年越し帰れそうにありませんので二人でいちゃついてて良いよお 母さんより。』

いちゃつく気は無し。

「ねえ、何だつて？」

「今年も帰ってこないだと。」

それだけ言い、弥美にその紙を渡した。

年越しも終わらし何時ものように初詣に向かった。

「混んでるねえ。」

「仕方ないと思うがなあ」

という他愛も無い会話をしているとふっと、弥美の姿が無いのに気付いた。

高校生になって迷子になるか普通？

等と考えながらも人ごみの中を掻き分けながら探していると不意に肩を叩かれた。

「ん？…！！」

僕は後ろを振り向くと白髪赤目の女性：のお面をつけた弥美がいた。
「アハハハハ どう驚いた？これね、十字架と吸血鬼って言うアニメのキャラクターなんだってえ、ちよつと聞いているの？」

「…え？ああ、スマン、ちよつと一人にしてくれ。」

そう言い、僕は不思議そうな顔をするあの人の妹から離れた。

境内の中の木々が生い茂る中で僕は先ほどくすねた煙草に、花火の着火用に使っていたライターで一服していた。…いや、気を落ち着かせていた、の方が正しい。

「…ヒカリさん。」

僕はその白髪赤眼のキャラクターに良く似た女性の名前を呟き、煙草を踏み消した。

「……ん？」

何か、いやあな感じの風が吹いたかな？

そんな事を考えライターを胸ポケットに入れ、弥美の元に向かった。

案の定、嫌な風の正体は闇に纏わりつく死神よりも悪質なチンピラであつた。

情景から察するに弥美に近付いたは良いが僕に置いてけぼりにされイラついていた弥美に仲間の一人が蹴られて力つとなり、ナイフを振り回してゐるって所かな？…全く姉妹揃って厄介事を僕に押し付けてくれる。

「おおい、その人、正月から暴れ回っても何も言い事無いぞお。」

「等と呑気な事を言いながらそのチンピラに近付いていく。」

「あぁん?... なっ?! お前は!」

「ん?... 僕を知ってるのか?」

「僕? はっ! 良い子気取りか手前。散々人の仲間苛めてきて...」

「... 良い子気取りねえ、コイツどつかであつた事あつかなあ?」

「如何した? また、大事な人殺されるのが恐いか? また殺つてやるか?」

「... ん? いま、コイツなんて言つた?」

「ほらほら、やらないんなら、またヒカリ奪つてやろうかな?」
その名前に耳を疑つた。

「... 今なんて言つた?」

「あぁ?」

「今何て言つたと聞いてるんだよ、クソが。」

今の俺は死神だぜ。怖い怖い、闇の道化師だ。

「へえ、驚いた。大事な人ころした奴知らなかったんだあ。意外だなあ。」

「ね、ねえ、ルミ? 何言ってるの?」

「少し黙つててくれ。」

「ほう、良い趣味してないね。ヒカリさんと同じ呼び方させるなんて。」

「悪いが俺がそう呼ばしてるんじゃない。最初っからそう呼んでるんだ。つつか、引き下がってくれないかなあ? もう、俺の臨界点突破しかけてるんだけどなあ。」

「あっそ。」

男はそれだけ言い、俺に向かつて走つてきた。俺はそいつの手を掴み、奴のスピードを使いもと来た方向に投げ飛ばしてやった。

「動くんじゃねえぞ。」

後ろからそんな声が聞こえ振り向くと弥美が首先にナイフを押し付けられていた。が、何時もの俺ならこれで臆する事は無かつたであ

ろう、その状況にある記憶が掘り起こされ一瞬の隙を生じさせてしまった。次の瞬間後ろから何かに押される感じと共に痛みが走った。「昔の恋人が撃たれる瞬間でも思い出したか？」

男の声が聞こえてきただが、そんな事は如何でも良い、俺は直ぐにその男の方を向き手刀で相手を眠らし、背中に刺さっているそのナイフを抜いた。

「う、動くんじゃねえぞ！！」

「うごかねえよ。この場からは。」

そう言い、俺は右手にある血塗られたナイフを弥美に刃先を向けている男に向かって投げつけた。ナイフはダーツの矢の如く男の左肩を刺した。

「グアッ！」

俺はうめき声を聞く間もなく、男からナイフを奪い取りナイフの柄、相手の首に一撃を与えた。

「ハア、ハア。」

一瞬の出来事でもあったであろうが僕には長く感じられた。だが、口から赤い何かを吐き出す事により時間の感覚が戻った。

僕はその場に倒れた。

…ナハハ、ざまあねえな。

自嘲の言葉を心の中で吐き、僕は意識を手放した。

冬休み（後書き）

ヒカリとヤミ、二つの関係はいかに

日夏利、僕の恋人

気がつくとそのは病室であつた。

「……」

取り敢えず、生きてはいるようだ。手を動かしてみると何やら点滴の針が刺さっているのが解る。あんまり、良い気分ではないな。起きようと体を起こしてみる。

「イタッ」

背中に激痛が走り起きようにも起きられない。声から察するにこれから偶数日経っているらしいつまり今はルミである。

首を動かして周りを見てみると今は誰も居ないみたいだ。テーブルの上に本が置いてあり、題名は…

「僕とLの奇跡…?」

…なっ!?!何でこれが此処にあるんだ?!つつか、誰だ?!これを持ってきた奴は!?

等という思考を走らせていると扉が開き、黒髪黒目のツイテールが入ってきた。

「え?…る、ルミ!!?」

人の名前を叫び、持っていた物を床に散乱させ抱きついてきた…

「イッタアア!!!!」

激痛、さっき以上の激痛が走った。

「アッ!ゴメン。大丈夫?」

「大丈夫だったら痛がらない。」

「んもう、人が折角心配して上げてるのに何でそう突っかかるの?」
「……」

お面を見て以来、弥美を見ているとちらつくヒカリさんの姿。如何したんだろ?ボク。

「おんやあ?目が覚めましたか?龍炎さん。」
久々に聴くあの人の声。

「大岩さん。何か用ですか？」

「ナツハツハ、いやあ、取り敢えず、貴方がぼこしてくれたお陰、被害者たちが話してくれましたよ。二年前の事。」

「……そうですか。」

「おんやあ？聞きたくないんですか？狙撃を指示した犯人の事。」

「あの二人の片方でしょ？」

「あらら、何か言っちゃってましたか。」

「ああ、また大事な人が殺されるのが恐いか、だと。」

「それってこの中のしって人？」

「そう言い弥美はあの疑問の本を持ち出した。」

「何でそれが此処にある？」

「何ででしょうねえ？」

等と惚けた事言う大岩さん。

「答えなさいよ！これ何なのよ！」

「一人称日記型恋愛話。」

「で、誰なのよ？しってついでにDも！」

「しはライト、つまり光。Dはダーク、つまり闇、闇はお前。」

「だから、光って誰よ？」

「……黙秘権を行使する。」

「……そんなに背中を叩かれないの？」

「そこに書いてあるとおり。」

「だから、死に際の言葉についてよ！『Dを守って』って如何いう事よ？あたしそんな人知らない！」

「良いんですか？言わなくて。」

「どうせ知ったって意味ないし。」

「……よし、果物ナイフでサクッと。」

何でこの姉妹は言いたくない事でも乱暴に吐かせようとするんだ？

「……はあ、姉は品乳で、頭は良いけど、妹は胸にバツカいって馬鹿だし、何なんかなあこの姉妹。」

「龍炎さん、声に出てますよ。」

「……え？」

弥美を見るとワナワナと震えている。

…あれ？若しかしてボク、ヤバイ事言っちゃったかな？

「誰が馬鹿なのよ！？誰が胸にバツ力行ってるんですって!？」

……オーバーキル確定。

数分後ボクは三時間ほど夢の旅に出かけた。

「で、姉って誰よ？」

…本当に馬鹿だ。

「日夏利さんですよ。知らないのは、親父さんが再婚する前に孤児院に預けたから。ですよね？龍炎さん。」

「なんで、ルミに確認するのよ。」

「だから、その本書いてある事は全て事実なんだって。何か小遣い稼ぎになるかなって感じて出した本だけだな。」

「取り敢えず売れましたよね？これ。」

そうそう予想に反して売れちゃったな。これ。

「ていうか、何でその事黙ってたのよ。」

「ヒカリさんに言うなって言われてたからに決まってるだろ？」

後、何かややこしい事になりそうだったし。

「ねえ、それ知ってて反対しなかったの？」

「いや、似てるなあとは思ってたけど。まさか、姉妹とは思わなかったよ。」

マジ話、まあ、事実を聞いても似てるからそれほど驚かなかったけどな。

「で？」

「で？って何が？」

「その本の印税たんまり貰ったんじゃないの？」

「あ、それは…ちよつとな。」

相棒の修理に使ったなんて言える訳ないし。

「そつえば、ヒカリさんのバイクって如何したんですか？」

「……」

やべえ、変な汗出てきたあ。

「バイク？」

「ええ、確か、龍炎さんも乗ってましたよね？真っ黒く塗装した改造バイク。愛称が…確か『死神の鎌』でしたよね？あれって何処に仕舞ったんですか？」

「そんな物うちにありませんよ？」

「地下室って調べましたか？」

「…え？地下室？」

大岩さん、後で闇討ちしますよ。

「地下室って何よ？」

「…退院してからな。」

「又。」

弥美のふくれっ面を見ながら何を整理しようか思案し。

「お前が人の仕事場、荒らさないとは限らねえだろ？」と反論しといた。

「何よ？荒らされちゃ不味い物でもあるの？」

「あるかもな。」

「ところで、龍炎さん、そろそろ普通に呼んでもらえませんか？」

「自分から渡したんですよ？あの誤植名刺。」

「良いじゃないですか？警戒心を解いてもらうための物なんですからあ。」

「それ言っちゃって良いんですか？」

「良いんですよ少なくとも貴方方なら。」

まあ、そうかもしれないが…この人ホント警察官なのか？名前的にも興宮署のあの人っぽいし。

等という会話をしていると先生ぽい人がやってきて、精密検査を始めた。どうやら、今日を含めて三日間ほど寝てたらしくその間に弥美と見舞いに来たドクターから事情を聞いたらしく何も言わずに仕事をしていった。

「ふむう、それにしても面白い博士ですね。」

「単なる工口野郎ですよ。」

弥美が少しイラつきながら答えた。

「？何故この人が怒ってるんですか？」

「弥美の母方の叔父なんです。」

「成る程。」

等と他愛も無い話しをし二人は帰っていった。

深夜、妙な気配がしたので起きると拳銃を向ける茶色の短髪の男性が居た。

「沖田、見舞いに来るには物騒な物持つてるな。」

「見舞い？んなあ、たいそうな事はしませんぜえ、単に見納めって事でさあ。」

そう言い、沖田はその銃の引き金を引いた。

バアアン

銃声と共に銃口から花が舞った。

「で、そんな挨拶と共に何の用かな？」

「つれないでさあ。死神さん。まあ、用と言うほどの用でもないんですさあ。」

そう言い、花の飛び出た銃を懷に仕舞い近くの椅子に座った。

「それで、用というのは、戻ってきてくれないかって事でさあ。」

「言っただろ？俺はあの人が居たからそこに居たんだった。だからあの人居ないあそこは俺にとつては如何でも良いものなんだ。土方に任せておけば良いんだよ、土方に。」

「あの男の下で働く何ぞ嫌でさあ。」

「だったら抜ければ良い。」

「それも少し嫌なんでさあ。それと、あの人を守ってきた者を守らねばならない。あんたとは違う考えで俺はあそこに居るんでさあ。」

「たくう、少し我慢するか、闇討ちして土方から奪っちゃえば良いんだよ。」

「あのなあ、少しばかり穏便に行かなきゃ、俺はあアンタと違い臆病なんです。」

「臆病ね。まあ、少しばかり我慢してろ。そしてりゃ、少しは悪くないとは思えてくると思うぞ。」

「：へいへい、そうしますよ。ところで、死神さん。」

「ん？」

「名前、その姿には似合いませんぜえ、可愛いくしたほうが良いですぜ。」

「大きなお世話だ。」

「そうですか。」

等と言い、沖田は手を上げ去っていった。

「何しにきたんだ？あのサディスト。」

共通点がありすぎるという理由であんな名前付けたボクが言つのもなんだがな。

「新撰組：ある漫画キャラクターにそっくりの副長と隊長が居る為そう名づけた。フゝ、俺はマヨネーズ好きじゃねえぞ。ヘビースモーカーは認めるが。」

「土方、此処病院だぞ？」

「良いじゃねえか手前だつて吸つてたんだからな。」

「アレは昔の事だ。」

「二、三年程前の事だろうが。」

「良いじゃないか。それくらい昔だつて事だよ。」

「たくう、人が折角心配を見てやりにきつたてのによお。」

「沖田の後を付いて来ただけじゃねえのか？」

そう突っ込みを入れると土方は煙草を咳き込み始めた。

「たつく、察しが良いですな、死神さんよお。」

「で、お前は何の用だ？」

「用無し、単に見舞いだ。煙草吸うか？」

「病人に吸わそうと思うなよ。」

「病人つつたて単に背中刺されたただけだろ？あの時よりはマシだろ

？」

あの時、それは朴の目の前で大事な人が僕を庇って撃たれた時の事。その時僕は死神よりも最悪な存在に変わり、その場に居た敵を皆殺しに仕掛けた、勿論誰も死亡していない。でなければ、大岩さんの弁明が会ったとしてもこんなところには居やしない。

「まあ、あんたなら地獄の底からでも這い上がってくるだろうな。私怨の為なら。」

「悪いがもう、恨みで人を殺しかけたりはしない。二度と、な。」

「そうかい。んじゃ、俺は退散するぞ。」

「ああ、他の奴等によろしくな。」

「へいへい。」

そう言い、土方は去っていき、静かな夜となった。

本の館

今日、ボクは退院した。それは良いのだが、弥美に引つ張られる感じで家に戻ってきた。

「さあ、その部屋に案内してもらえるかな？」

「だろうとは思ってたよ。」

「…はいはい。」

そう返答し、部屋に入りキッチン近くの物置部屋の扉の前に立った。
「え〜っと。」

ノブの右に二個行つて、上に三個でああ、此处だ。そのタイルを少し押すと、タイルが開き小さなパスワード装置が出てきた。

確か：02141223だったな。

ポンポンと押していき、エンターキーを押し、物置部屋の扉を開く。

「之が地下への唯一の階段。」

そこにあるのは物置部屋ではなく螺旋階段が大きく鎮座している。

「こんな場所にあつたんだ。」

弥美の感嘆の声を他所にボクは地下へと歩いていった。

「あ、待つてよ！」

「足元滑る可能性があるからヨロシク。」

「ふ〜ん、そうなの。…フワッ?!」

弥美の奇声と共に闇が後ろからぶつかってきた。が、あらかじめ予想していたので両側の手すりに捕まっていたので巻き添えを食らわずに済んだ。

「おい、普通逆だろ?言つたほうがコケないか？」

「ごめん。」

謝れてもこつちが困るんだけどなあ。

等というベタかな?っていう展開と共に地下到達。

「この扉の向こうが地下室第1フロアって言う感じ。」

そつ言い扉を開けると暗い部屋、扉近くの電気のスイッチを押すと

ボクの相棒と知り合いが先に照らされた。

「ウワアアア。」

「黒いバイクがボクの相棒、白い方がヒカリさんのバイク。」
相棒の『死神の鎌』、それと『白き剣』

「どつちも凄く綺麗だね。」

「まあなあ、ドクターに金払って改修して貰ったしな。」

だが、直せる部分は自分で直したけどな。まあ、ヒカリさんのバイクはシヨップに出して直してもらったけどな。

「ねえ、ルミ。このバイクってどうやって運び込んだの？」

「……ちよつと着いてきて。」

そう言い入口から見て右側にあるエレベータを指差した。

「これ。」

「エレベータ？何処につながってるの？」

「本家。」

「本家？」

「ほら、ミーシャが来た時に言っただろ？引越したって。」

「ああ、そういえばそんな事を……え？直結？」

「んな事あるか。近くに山あるだろ？そこにつながってる。」

「……山？あの、えつと……炎山^{えんざん}？」

それ以外無いと思うのだが……

「そう、それ。」

「……凄いね。」

今更驚かれても……

「ねえ、それにしても。あの写真、誰？」

そう言つて弥美が指差した写真はボクがまだ小五くらいの時にヒカリさんと一緒に撮られた写真である。まあ、副委員長によって撮ったため少しピントは合っていないが。

「ボクとヒカリさん。」

「ふゝん、お姉ちゃんてこんな感じだったんだ。」

そう言い、写真を覗きこむ弥美。

「…はあ、次行くぞ次。」

「え？次？」

「こっちの扉の向こう。お前が来たって意味の無い場所。」

「そう言い、ボクは弥美がやって来るの確認し扉を開けた。」

「…わあああ。」

「ようこそ、我が書庫へ。」

目の前に広がるのは壁一面を覆い尽くす推理小説の棚。

「え？之全部本？」

「そう、その全てが推理小説。外国の推理小説も含まれる。」

「そう言い、感嘆の声を上げる弥美の横を過ぎ、ちょうど真ん中に設置してある机に向かった。」

「さて、始めるか。」

「え？何を？」

「何をつて、此処の掃除だよ。」

「フエッ?!」

「覚悟しておけよお。掃除するために此処来たような物なんだからさ。」

「…嫌だあ。」

「一応言つが、お前が寝静まった後にやってたんだぞ。お前の姉と一緒に。」

「フエッ!？」

まあ、寝た後にはやってはいないが二人でやったのは事実だぞ。

「じゃあ、さつさと始めるか。」

「はあい。」

数時間後

ピンポン

「ん？誰か来たのかな？」

机の上にある、テレビ画面の画面を切り替える。

「ん、意外と遅かったな。」

画面に映し出されたのは知り合い四人と担任。

『リュウ君、居るのお？』

「居るぞお。」

そうマイクに向かって言うとは何処からとも無く聞こえたボクの声に少し驚いた。

『今何してるのお？』

「キッチン近くの物置部屋有るよな、そこの扉あけて階段あるからそこを下ってきて。」

『分ったあ。』

数分後

「よお、来たぞお。」

「うわあ、何この部屋?!」

「本ばっか。」

「あれ?これって…」

「之全部推理小説だね。」

此処の反応は十人十色だな。

「ええ、よく分かりましたね。」

「あ、へび。ここに私連れて来たこと有ったよね?」

「ああ、それ、本家の方に有る、之の三分の一ほど有る小さめの奴な。」

「へえ、で今何してるの?」

「掃除。」

「之全部?」

「まあ、物の五時間強で終わるし。」

「五時間?!」

小学五年の時だけだな。

「まあ、人増えたから一時間くらいで終わると思っけどな。」

「え?若しかして…」

「俺達にやれと?」

普通にそうだろ?

「若しかしなくとも、他に誰がいるんだ？」

「確かに……」

数十分後

「終わりの。」

「凄い埃の量だな。」

「ああ、まあ、数年に一度くらいでやってるからな。」

「何でそんな感じでやってるの？」

「まあ、それほどあまり使わないって言う事だよ。」

「そういえばさあ、掃除してたらこんな写真見つけたんだけど。片方、リュウだとしたらさ、隣の白髪の美人さん誰だ？」

「え？」

芳賀が持つてる写真、それは中二のクリスマス。ヒカリさんの最後のクリスマスの時の写真であった。

「こんな所に有ったんだ。通りで探してもないはずだな。」

その写真を受け取り、机の上にある額縁に入れる。

……ホント、見つかつて良かった。

「あれ？……若しかして、これ天柳さん？」

「……え？先生知ってるんですか？」

天柳、ヒカリさんの苗字である。あまり上の苗字で呼ばれる事なかったから思い出すのに時間掛かった。

「だって、ヒイちゃんでしょ？」

「ヒ、ヒイちゃん？」

「そう、ヒイちゃん。胸無いけど優等生のヒイちゃん。ヤアミンとは違う可愛さをもってたんだよね。そのヒイちゃんの写真が何で此処にあるの？しかも、イルミネーション的にクリスマスだよ。あれ？若しかして付き合ってた？」

貴方は探偵ですか？

「え、え……ですね……」

付き合ってたといえは本当だけどそこを追求されるのはちょっと嫌だし、嘘はつきたくないし。

「うーん、まあ、良いかあ。それで、ヒイちゃんのお墓何処に有るの？」

「あ、それなら。」

そう言つてボクは先生に場所を教えてあげた。

「成る程成る程、そこなのね。」

そう言い、メモをしていった。その後先生はボクに手招きをして、相棒の居る部屋にボクを呼んだ。

「何の用でしょうか？」

「…このバイク。誰なの？」

「ボクとヒカリさんのです。」

「そうなんだ。白いのがヒイちゃんのだね。」

「そうです。」

「ヒイちゃんのバイク、とっても綺麗だね。それにヒイちゃんに似ている。」

「やつぱり、そう思いますか。」

「ええ…ヒイちゃん、何で死んじゃったか知ってるの？」

「はい。」

「そつか。あんまり気にしないほうが良いよ。」

「無理ですね。ボクのせいでヒカリさん死んじゃったんですから。」

「え？」

「…先生には自分の口で話します。」

そう言い僕はその時の話をし始めた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3240m/>

劣化薬による性転換

2011年3月15日13時01分発行